
毒舌？な簗(かがり)ちゃんのほのぼの才力研生活

雪海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毒舌？な^{かがり}篝ちゃんのはのぼの才力研生活

【Nコード】

N0354Y

【作者名】

雪海

【あらすじ】

この物語はRewriteの二次創作です。二次創作で且つ作者の技量が低いため、原作との矛盾、キャラ崩壊などが起きる危険性があります。もちろん矛盾やキャラ崩壊などはあまり起きないよう気を付けますのでそこまでは気にしなくても大丈夫……のはずです。

もし原作との矛盾が発生したとしても、ここはRewriteの世界とよく似た別の世界という認識でお願いします。ちなみに篝にはオリ主が憑依しますので、篝は完全に

違うキャラとなりますのでご了承下さい。ついでに簞は原作にはない能力を使ったりしますがそれについてもご了承下さい。

長々と書きましたが、最後にこの作品の成分について。

この作品は主に日常成分が多めです。バトルやシリアスも少しは入るかもしれませんが、ほぼ日常がメインと思ってもらってかまいません。

以上の事を踏まえた上で本編をお楽しみ下さい。

この作品は作者のブログ、二次小説創作所でも公開しています
公開の順番としては、とりあえずまず先にブログで公開して
細かな修正を加えた上でこちらに投稿という順になります。

この二次小説はネタバレが多分に含まれています

09月30日(木) プロローグ的なもの

「あれ？ ここはどこだ？」

目が覚めると何故か目の前に木々が立ち並んでいた。
周りを見渡してみると、やはり同じように木々が立ち並んでいる。
周囲の景色を見る限りどうやらここはどこかの森のようだ。

「俺は確か普通に家で寝ていたはずだが……」

OK。ちよつと寝起きで頭がすつきり

しないが今は異常事態というのは分かる。

一端落ち着いて何故こんな状態になったのかを思い出してみよう。

昨日は休日だったから Rewriteを一気に

徹夜で終わらせた後……眠ったんだっけ？

まあ徹夜で眠気がピークに達して

いたからそのまま意識を手放したんだろう。

うん、昨日の行動を振り返ってみても今の状況は全く理解できないな。

とりあえずは現時点での問題点を整理してみよう。

1.ここがどこだか分からない

部屋で普通に寝たはずなのに何でこんな森の中にいるんだろう？

2.何でこんな場所にいるのか分からない

もしかして誘拐でもされたのか？

でも家は金持ちでも何でもなし、誘拐犯もないみたいだから違

うかな。

3・この森がどの程度の広さか分からない
今いる場所からは出口は見えないから
それなり以上の大きさなんだろうけど……

よしっ！ 何が何だかさっぱり分からないということが分かったぞ
！！

とりあえずここに居ても何も分かりませんがまずはこの森を抜けだそう。

幸い向こうに川があるみたいだし、
川を下っていけばきっと森から出れるはず。

さて、まずは川の傍まで行くでしょう。
もしかしたら誘拐犯とかいるかもしれないし、
できるだけ物音は立てないようにっと。

よし、何事もなく川に到着。
さて、後は川の下流に向かって歩いていくだけだな。

ふと川を覗いてみると水面に黒いワンピースを着た少女が映っていた……

「誰だっ！」

振り返りながら声をかけるもそこには誰もいなかった……
見間違いか？ 確かにはつきりと少女の
姿が映ったように見えたんだが……

もう一度川を見てみるとまた黒い
ワンピースを着た少女が川の水面に映っていた。
振り返る。

誰もいない。

もう一度川を試してみる。

黒いワンピースを着た少女が映っている。

あれ？ まさかとは思うが……。

俺はある恐ろしい仮説を思いついたため、左手を挙げてみた。
すると川の水面に映っている少女も左手を挙げた。

ま……まだ何かの間違いかもしれん……

その後様々な複雑な動きを試みたが川の水面に映る少女の
動きと完全に一致したため、仮説が正しいと認めざるを得なかった。

というかちょっと視線を下に向けたら黒いワンピースが見えた。
最初から下を向いてれば早かったな……。

まあとりあえず色々と不可解な出来事が起こっているが
もう一度現状を確認してみよう。

1・ここがどこだか分からない

もう色々とおかしな事が起きすぎてどうでもよくなってきた。

2・何でこんな場所にいるのか分からない
上に同じ

3・何故か見た目がRewriteの篝^{かがり}
さつき川に映った顔を見て分かった。

不可解な現象は正直これだけでお腹一杯です。

以上の状況を踏まえていくつかの仮説を打ち立てた。

1・実は俺は篝だった。
ない。これはない。

2・これは俺の夢である。
ありえる。というか可能性としては一番高い。

篝の姿なのも Rewriteをやった後すぐに寝たなら納得できる
気がするし。

だけどそれにしては意識がはつきりしている気がする。
今まで見たことが無いから分からないが、
もしかしてこれが明晰夢ってやつだろうか？
まあ現時点では確認の仕様がなし、この仮説は保留だな…。

3・俺が篝に憑依した。
どこの二次小説だよ！！って突っ込みたところだけど、
夢以外の可能性としてはこれくらいしか思いつかないし、
十中八九夢だろうけどこの仮説も一応保留としておこう。

今の所はこのくらいしか思いつかないな…。
まあ夢だった場合はしばらくすれば目が覚めるだろうし、
最悪を予想して行動した方がいいだろう。
とにかく現時点では、憑依したと仮定して動くでしょう。

……とりあえずまずは寢床の確保からだな。

10月01日(金) 原作開始？

「篝さんマジでスペック高すぎ！」

おっと、あまりにハイスペックな身体についつい一人で叫んでしまった。

お久しぶりです。篝です。初めましての方は前話を読んでみましょう。

さて、メタな発言はこの辺で辞めておくでしょう。

とりあえずあれから寢床をさがすついでにどんなことができるか色々実験を試みたらこの身体のとんでもないスペックが発覚。

1・身体能力が物凄く高い

何かジャンプしたら普通に数十メートルは跳んでどの方向に街があるか分かった。それと試しに木を殴ってみたら、
ぱきつと木が折れた。

2・リボンが強い

あの後しばらくしたら身体がなじんだのか普通にリボンが使えるようになったので、試しに木にぶつけてみた。木が砕けた。

3・認識攪乱能力が便利すぎる

リボンが使えるようになったところ認識攪乱能力？も使えるようになった。もしかしてこの能力使わなかったらガーディアンとかにも発見されないんじゃないかな？

まあ認識攪乱能力は自分一人じゃ確認できないし、

後で再度実験してみるとしよう。

後分かったことといえば、どうやら夢じゃなかったみたいだ。丸一日くらいは経ったと思うけど全然目覚める気配がない。夢じゃないと分かった時はちよつと絶望しかけたけど、考え方を変えてみれば案外これはこれでありかもしれない。家族や友人に会えないのはつらいけど、超ハイスペックな身体が手に入ったし、Rewriteはかなり面白かったし。死亡フラグ満載だけどこの超ハイスペックな身体でばつきばきにへし折ってやんよ！

さて、色々と一人でできる確認も終わったし、とりあえずさつきジャンプした時に見えた学校っぽい所に行ってみようかな。まだここがRewriteの世界と決まった訳でもないんだし……認識を攪乱！何か一々面倒くさいから不可視状態とでも名付けておこう。

不可視状態なら見つかることはないだろうし、さっさと行くとしてよう。

とーちゃく！

まさかあの森から数分で学校まで行けるとは……

しかも周りに与える影響を考慮してスピードを抑えた状態でこれだし……

でも簞は星の化身な訳だしむしろこの程度の能力は妥当なのかな？

まあとりあえず学校には誰にも見つからず無事着いたんだけど、広い……

マンモス校っていつでも限度ってものがあるだろう……

こんなんじゃない瑚太郎がいるかどうかの確認だけでも一苦労だよ……

「もういい加減、我慢ならねえ……」

あれ？ 聞き覚えのあるこの声はもしかするともしかする？
声の聞こえる方へと駆けつけてみると不良？の吉野が瑚太朗に
食ってかかっていた。

ひょっとしたらこれは丁度原作が始まった時期なのかな？

だとしたらラッキーだな。オ力研には入りたいと思っていたし。

瑚太朗がオ力研に入部しなかったら他のメンバーも入らないだろう
し、

瑚太朗が入部するまでは原作から外れないように気を付けるとしよ
う。

「残念だよ吉野：親友同士で争うことになるなんてな」

おっと、考え事をしている間に話が進んでるな。

「デメエと親友になったつもりはねえ！

そいつを今日、体に理解させてやる」

人も集まってきたみたいだし、ちょっと実験でもしてみようかな。

「きゃ〜。天王寺君と吉野君どっちが攻めでどっちが受けなのかし
ら！」

ふ〜。女言葉で喋るのはまだちょっと精神的にくるものがあるな……
まあ今の俺はどう見ても美少女だしその辺は
慣れていかないでしょうか。

「え……どうしても言わないと駄目か？」

瑚太郎が顔を赤くしながら言う話を

聞いていた数人の女子の顔から鼻血が！？

自分で煽っておいて何だけどまさか鼻血を

出す人がいるなんて思いもよらなかったよ……

それと瑚太郎。吉野をいじりたいのは分かるが、

これから吉野とのＢＬチックなものを妄想されるんだぞ。大丈夫なのか？

吉野いじりだけのために何か大事なものを失って

しまっているような気がするんだが……

まあそれはいいとして、瑚太郎は俺に気づいてないみたいだな。

中身が変わっているからなのかどうかは分からないが、

特に何もしていなければ瑚太郎には気づかれないようだ。

「おい天王寺、それじゃお前と俺が付き合ってるみたいじゃねえか！」

なら後の問題はガーディアンにいる俺を見ることのできる奴くらいだな。

ガーディアンの中でも不可視状態の俺を発見できる奴はほとんどいない

はずだし、今度暇な時に西九条先生辺りを尾行でもしてガーディアンの

情報を入手してこよう。

「…放課後だ。忘れるんじゃないぞ」

「ああ、理解^{わか}っている」

あれ？ B L 方面に誘導したのに考え事をしている間に本筋に戻ってるよ。

ま、まさかこれが世界の修正力というやつか……
何て冗談は置いておくとして、この後は特に
イベントはなかったはずだし今日はもう帰るかな。

さて、住所不定無職な現状を変えるためにも
明日は奴の所に行くでしょう……

10月02日(土)

突撃、神戸家の朝ご飯

「という訳で、今日は神戸家の朝食の席にお邪魔してまゝす」

やっぱり事情を知る協力者が必要だね。という結論に達したので、今日は小鳥の協力を取り付けにやってきました。小鳥と協力すれば寢床、協力者、和みと色々な特典つき。これは協力しない手はない！まあ実際ここで軽く事情を話しておかないと、ドルイドの使命で青春がぐつつやぐつつになるだろうし、今の状態ならもう守ってもら必要もないからね。

「あ、すいませんけどご飯のお代わりお願いします」

図々しくも理香子さん（小鳥の母親）にご飯のお代わりを要求しております。

…… 勿論小鳥じゃなくて私がだよ。

小鳥さんはまだ寝ておられるようです。

全く寝ばすけさんめ

…… さすがに は無いかな。

とりあえず敬語メインならあんまり違和感ないし、

基本的に敬語を使いつつ、男口調を出さないよう気を付けよう。

ちなみに理香子さんはどうやら私のお願い（命令）は聞いてくれるみたいです。動力源にパワースポット使ってるからかな？

まあ都合がいいので良しとしよう。

「朝ご飯を用意して」

お、ここでもようやく小鳥が登場！

こっちを見もしないで冷たく言い放ってるみたいだけど、
やっぱり魔物ということで線引きしようとしてるのかな？

「それと今日から泊りがけで森に行ってくるから、
明日の夜までご飯の用意はしなくていい」

さすがにそろそろ口を挟まないと小鳥が無駄な行動を取ってしまう
ね。

さて、記念すべき第一声は

「その必要はありません」

何かあつちの簞っぽくなってしまった。

まあ敬語キャラで行くとなるとあつちの

簞っぽい喋り方になるのかもしれないか。

「え！ 何で鍵が家に！？ しかも喋ってるし！？
一体何が起こってるの！？」

おゝ混乱してる混乱してる。

まあいきなり家に鍵が居たらびっくりするよね。

「家に来たのは少し状況が変わったからです。
後、残念ながら夢ではありません」

何ていっても今までの簞とは別物になっちゃったからね

「ちなみに私の名前は簞なので今後はそう呼ぶように」

さすがに鍵呼ばわりはちょっとやめてほしい。

「あ、はい分かりました。って名前の事はどうしてもいいですけど状況が変わったというのは？」

どうでもいいなんてひどい！

とまあ名前の件は置いておくとしてやっぱり状況の変化の方が気になるか。

では、説明タイムをスタートさせますか。

「状況の変化というのは私が知性を獲得したことです」

本当のところは別人になったただけなんだけど、まあ話がややこしくなるしそこは言わなくていいかな。

「知性を獲得したことで自衛能力も向上しましたので、もう私を守る必要はありません」

実際、原作でも簞に自衛する気があったならそう簡単には殺せないだろうしね。

「守らなくていい、ということは私はドリイドの使命から解放されるんですか？」

解放か……

やっぱりドリイドの使命とか面倒なだけだね

「そういうことになりますね。それと敬語は別に使わなくていいで

すよ」

何か小鳥が敬語を使っていると、違和感があって妙に落ち着かない。

「分かりまし……分かったよ」

これでよし！

「では、今日からここに泊まるので部屋の用意をお願いします」

さりげなくこちらの要求を伝えてみた。

「へ？」

やはり流れに乗って有耶無耶のうちに泊めてもらうのは無理があったか……

「ですから、住む所がないのでここに住みます」

もしかするとOKが貰えるかもしれないので、もう一回言ってみた。

「ええと、突然そんな事を言われても小鳥さん困っちゃうんだけど」

やっぱりそう簡単にはいかないか。

よろしい、ならばここからは交渉の時間だ。

「瑚太郎がちょっと危険そうでしたので、ボディガード
でもしてあげようと思ったのですが…」

とりあえず瑚太郎をえさに見してみる。

「部屋は余っているのでどうぞ自由に使い下さい！」

交渉タイム終了！

っていうか変わり身早っ！

しかも何が危険なのかとも聞いてこないし。

「いいんですか？ 正直こんなにあっさりと

決まるとは思っていなかったのですが……」

「いいっていいって。嘘ついてるようにも見えないし」

まあ確かに嘘はついてないね。

瑚太郎にもそこそこ死亡フラグはあるし。

「では今日からここに泊まらせてもらいますね」

……何かえらくあっさりいったけど、これで寝床ゲットだぜ……！

10月03日(日)

小鳥、一芝居打つ

「怒られちゃうと思うけど、耐えろ」

お、瑚太郎の声がする。

ということはようやく小鳥たちが帰って来たか。

中々待ち長かったな

こんなことなら戻ってきたら知らせてくれるように
理香子さんに頼んどけばよかった。

……え？

時間が飛びすぎていて訳が分からない？

まあ実際あれからはあんまり特別なことはしてないよ。

居候になることが決定したから色々と必要な家具を買ったり、

何故瑚太郎が危険なのかを小鳥に説明したり、今の状況を作り
出すために話し合いをしたりしただけだし。

ちなみに今は夜で、さらに言うと森から帰ってこなかった小鳥を
瑚太郎が探し出して来たところだね。

何故小鳥が森に行ったかというと、もう今後あまり森には行かない
だろ？から、夜遅くに帰って理香子さんに森への立ち入り禁止令を
出してもらって、自然と森との接点を断つという作戦のためだ。
どう見ても自作自演だけど、そこは気にしない方向で。
さすがに瑚太郎が気づく訳はないし。

「家出するならうち来い。部屋あいてるから」

「大丈夫。神戸家は放任主義だから」

「そうか？ さすがにこの時間じゃ大目玉だろうに」

後、瑚太朗が危険な理由としては予知能力で危険な未来が見えた、という事にしておいた。まあ嘘なんだけど、あまりうまい説明が思いつかなかったからしょうがない。さすがに予知能力に関しては完全には信頼して貰えなかったので、明日ちはやが転校してくるのをうまく予知っぽく利用して納得してもらおう。

「それがあんた、うちときたら……」

「小鳥さん、戻りましたね」

「おわっ！」

理香子さん出現。っていうか瑚太朗はちよつと驚きすぎだろ。

「あ、ただいまだよ、おかーさん」

「大事なようですね」

「うん、もちろんだよ。森は庭みたいなものだよ。

快適すぎてつい昼寝しちゃったよ」

とりあえず今の時間から考えると昼寝ではないと思う……

「……小鳥さん、森に入るにあたって私とした約束を覚えていますか？」

「ええと？」

「どうやら覚えていないようですね……」

「遅くなる場合には連絡を入れること」

「あっ！」

「どうやら思い出したようですね。

ですが、さすがに連絡もなしにこんな時間まで帰ってこないとなると……」

理香子さんが悩んでいるようだ。（演技です）

「小鳥さん、今後一か月は森に立ち入り禁止とします」

よし、これで小鳥が森に行かなくなっても何ら不自然じゃない。
そして理香子さんは瑚太郎に視線を移した。

「よく働いてくれました」

瑚太郎は下男のように頭を下げる。

「へえ。すいやせん、予想外に手間取っちゃって」

「いいえ、ご苦労様でした」

「おかあさんおかあさん、瑚太郎君はいい仕事をしたよ。
どーんとお礼してあげてよ。どーんと」

理香子さんは瞑想するように目を閉じた

「…いいでしょう」

「ほうびて…」

「何か？」

「ありがたくちようだいいたします」

「結構。では小鳥さん、帰りますよ」

しやなりしやなりと去っていく……のはいいんだけど。
二人ともちよつと明るすぎない？

まあ瑚太郎に疑われないなら問題ないし、
そこまで気にしなくてもいいかな？

「んで…」。

結局叱られたみたいだけど、明日は学校来れるか？」

「うん、行くと思うよ。休んではっかりもいられないしね。」

それに今回の件は私が約束破っちゃったからしょうがないよ」

「そっか。まあ小鳥が落ち込んでないなら別にいいけど」

「ま、立ち入り禁止っていつても一か月だしね」

「OK。んじゃまた明日学校で」

「うん、おやすみ」

小鳥は両手をにぎにぎと開閉しながら、理香子さんのあとを追っていった。

「…一仕事だったな」

では瑚太郎の才力研入部フラグを立てるために、

こちらで一仕事するでしょう。

今まで全然出番なかったし、ここからはずっと私のターン！！

「引きあげるか」

じーっと瑚太郎を凝視する

「……ん？」

さらにじーっと瑚太郎を凝視。

「…まさか」

全然何も感じなかったらどうしようかと思ったけど、
瑚太郎はちゃんと視線を感じているようだ。

「帰るか…」

ここでさらにダメ押し!!

瑚太朗の背中に向けてリボンを射出!

あ、もちろん威力は最低にしてますよ。

普通にリボンを放ったら瑚太朗死んじゃうし。

「…え?」

瑚太朗が振り返る。

「……っ」

瑚太朗がダツシユで帰った。

よし、後は寝込みを襲うだけだな。

これで瑚太朗のオカ研入部フラグが立つはず。

……… そういえば瑚太朗の家ってどこだろう?

瑚太朗はもう見失ってしまったし。

……… しょうがない。小鳥にでも瑚太朗宅の場所を聞いて
本日の最終イベントを終わらせてくるとしよう。

10月04日(月)

ちはやふる

「おはよう簞」

朝目覚めてリビングに行くとは何と理香子さんが挨拶してくれました！
小鳥は無視するかもしれないけど、私としては無視をすると心が痛む
のでとりあえず理香子さんに朝の挨拶を。

「おはようございます理香子さん」

ただ、挨拶してくれるのはいいけど今いち感情が読み取れない。
小鳥ルートの最後の方で普通に受け答えしていたように見えたのは
やっぱりただの反射なのかな？
ちなみに簞という呼び方はこっちからお願いしてみました。
ちゃん付けはちょっと嫌なので呼び捨てということで。

「…わかった。じゃ今日は先に行くわ」

「すまないねえ」

「…一応確認するけど、実は体調悪いとか？」

「うんにゃ。気分は悪くないんだけど…爆睡しちみたい」

「昨日あんな昼寝しといてなあ」

「面目ない」

「ん。じゃ、またあとでな」

お、小鳥は瑚太郎と電話で話しているようだ。ちゃんと昨夜
二人で話し合ったように寝過ごしたという設定で会話してるね。
小鳥が普通に登校しても今日の出来事は変わらないかもしれないけ
ど、

念のために原作と同じ状況になるようにしておいた。
今日は小鳥に予知能力を証明する日だからイレギュラーはとりあえず排除。

後は、ちはやが木から落ちることなどを予知という形で先に伝えておけば問題ないはず。

ドタドタと階段を降りる音がして小鳥がリビングに入ってきた。

「おはようございます小鳥」

やっぱり朝の挨拶は大事だね、という事で小鳥にも朝の挨拶を。

「おはようだよ篝ちゃん」

ぐはっ！

篝はちゃん付けされたことにより10のダメージを受けた
というのは冗談としてもちゃん付けはまだちょっと勘弁してほしい。

「小鳥。ちゃん付けは止めてもらいたいのですが……」

「何か呼び捨てはしつくりこないんだよ」

まあ確かに見た目は年下みたいなんだけどね。

「それにしてもうまくやったみたいですね」

「うん。昨日言われた通り寝過ごしたということにしておいたよ。

ところで今の言い方からするともしかして会話内容を盗み聞きしてたり??」

「盗み聞きとは失礼な！ あれくらいの声の大きさなら
そのようなことをせずともこの場から聞き取れます」

「余計ひどいよっ!」

「大丈夫です小鳥。普段はそんなことはしていませんから」

さすがに少しは意識を集中しないと聞き取れないし、別にプライバシーの侵害までする気はないからね。

「ならいいんだけどさ」

どうやら小鳥も納得してくれたようだ。

「それではもう少ししたら学校に行くのでしょうか」
「わかったよ」

1時間後

「では小鳥は教室にこっそり侵入してください」
「らじゃー」

小鳥が元気に返事をする

「今は授業中ですしもう少し静かにしておきなさい」
「あ、ちなみに小鳥には分かりづらいかもしれませんが、今私の姿は小鳥以外には 見えていませんから、傍から見ると独り言を話しているおかしい人ですよ?」

実際周りに人が居たら生暖かい目で見られていただろう。

「それは先に言っておいてほしかったよ篝ちゃん!？」
「だからちゃん付けは止めてほしいと……」

「はあ… もう好きに呼んでください……」

小鳥の説得はちょっと難しそうだ。

まあこれから小鳥以外にも呼ばれる事もあるかもしれないし、その予行演習と思って大人しく受け入れておこう。

「そうそう、人間諦めが肝心さね」

「私は人間ではないですけどね」

身体は魔物、心は人間。

その名は、星の化身篝！！

「そういえばそうだったね」

あれ？ もう私が鍵つてことを忘れてらっしやる？

「ここ数日の篝ちゃん的生活態度を見てたら

そんなことすっかり忘れてたよ」

まあそこは元人間ですから。

「それでは無駄話もここまでにしてそろそろ行きなさい小鳥」

「りょーかいだよ」

「私は別に行くところがありますから昼休みにまた合流しましょう」

「じゃあまた後でね」

「はい、ではまた後ほど」

小鳥と別れて一人取り残される。

さて、今のうちに才力研の場所でも確認しておくかな。

確か5Fのはずだし、一フロア程度なら楽に探し出せるだろうしね。

……まさかこんなに早く見つかるなんて。
まあ今の所は特に用事はないけど、教室に戻っても授業があつて
だろうからしばらくここで休憩しておこうかな。

……

……

……

はっ！

いつの間にか眠ってしまったてた！

えーと今の時間は。うわっ！ もうすぐ昼休みだ。
急いで教室に戻らないと。

「……小鳥」

瑚太郎が小鳥を昼食に誘いたそうな目で見て
いる。ふうー何とか間に合ったみたいだ。

「ん？」

「ランチ、俺もここで食っちゃだめ？」

「いいけど……お弁当持ってきた？」

「……ひとりメシ行ってくら」

「いってら」

瑚太郎……誘う前に食べる物が無いことに気付こうよ……
まあ予定通り瑚太郎も外にご飯を食べに行つたみたいだし、
こちらも予定通りに動きますか。

「では小鳥、私たちも行きますよ」

こくこくと頷く小鳥。

小鳥を伴って廊下に出て、誰もいないことを確認したので小鳥と手を繋ぐ。

「これで小鳥も周りからは認識されなくなりましたから、
もう喋っても 大丈夫ですよ」

「それでこれからどんなイベントがあるのさ？」

「転校生が降ってきます」

「Why？」

「ですから文字通り転校生が降ってきます。
まあ実際に見た方が分かりやすいですね。

という訳なので校門付近で適当に話でもしながら時間を潰しまし
よう」

移動中……

「ではちよつと口裏合わせをでもしておきましょうか」

「口裏合わせ？」

「はい、これから数日内に瑚太郎がオカルト研究会、通称オ力研に
入部

しますから、護衛の件も考えて私も入部しようかと思ひまして」

「ふむふむ」

「そういう訳なので、小鳥と私はボランティアで知り合つて
気が合つた親友という設定にしておきましょう」

「それから細かいことを聞かれたら詳しいことは
あまり知らない　ということで乗り切ってください」
「らじゃ」

「わあああーっ！？」

「がさがさあーっ！」

「はい、そうこうしているうちに転校生が降ってきました」

「ええ！？　降ってきたって一体どこから？」

「さあ？　あの崖の上からじゃないですか？」

「転校生さんは大丈夫なの？」

まあ、ちはやは物凄い耐久力を持つてるからね。

「転校生は頑丈なので大丈夫です」

「あの高さから落ちてるのに頑丈で済ませるの！？」

「まあ細かいことは気にしない方がいいですよ」

ちはやだし。

「では私の予知能力は本物ということでもいいですね？」

ちはやが落ちてくる事までピンポイントで当てたし、
まあ大丈夫だろう。

「うーん。確かに見た感じ仕込みとかじゃないみたいだし……
わかった。予知能力のことも信じるよ」

よし、予知に関しては信用してもらえたみたいだ。

「では、私はやる事がありますし今日は帰りますね」

「じゃあまた家でね」

小鳥がぶんぶんと手を振る

「はい小鳥、一旦さようならです」

私も負けじと手をぶんぶんと振って小鳥と別れた。

……さて、じゃあ後は家で社会情勢の勉強をしたり……
ネットサーフィンしたりゲームしたりアニメを見たりしよう

10月05日(火) 簗ちゃん暇を持て余す(前書き)

今回登場する記号は、

『』が小鳥にしか聞こえていない状態の簗の声

><は小鳥がノートに書いた文字となっています

普通の「」だと会話文と見分けがつけにくいと思っただため上記のように使い分けました

尚、二人揃って不可視状態になっている場合は通常の「」を使用しています

以上の事を踏まえた上で本編をお楽しみ下さい

10月05日(火)

篝ちゃん暇を持て余す

「暇だ……」

小鳥は学校に行っただけ……

小鳥が才力研に誘われるまでは才力研メンバーとの接触は避けたいし……

よし、接触はできなくても見てるだけでもきつと楽しいはず！

今日はちはやが転入してくる日だし、ちはやと瑚太郎の夫婦漫才を見てれば暇つぶしになるさ。

「という訳で来ちゃいました」

「来ちゃいましたて……」

呼び出された理由が暇つぶしだと知った小鳥は呆れ顔だ。

「まあいいじゃないですか。どうせ小鳥以外には見えないんですし」

「私に見えるつてのが問題なんだけどね……」

「いい！？ 授業中は邪魔しないでよ？」

「それは授業中に邪魔をしろ、というフリですか？」

押すなよっ！ 絶対押すなよ！ 的な？

「違うよ！？」

「まあ冗談ですからそう気にしないでください」

さすがにそんなひどい事はしないよ。

「では、私の目的も伝えましたし、教室に戻りましょう」
「暇つぶしは目的っていうのかな…？」

小鳥のつぶやきが聞こえたが、そこはスルーしつつ教室に入る。
そしてしばらくすると寝癖全開の瑚太郎がやって来た。

「おはよー小鳥」

「おはよう瑚太郎君」

「それにしても今日は随分遅かったね？」

「ああ、それなんだが聞いてくれよ小鳥。

俺はセツトした目覚ましにより時間通りに起きたわけさ。

でもまだ眠い、時間的にもうちよつと眠っても

大丈夫という誘惑に負けちゃって……」

「二度寝しちゃったんだね」

あるある。二度寝って遅刻何かの危険があるけど中々抗えないよね

「というわけで今日は危うく遅刻しかけた」

「へー」

「じゃあこれ寝癖？ 新しいヘアスタイルかと思った」

「ん」

これだけ斬新なヘアスタイルは存在しないと思う…

「うへ…寝癖直してる時間とか全カットだったかんねえ…」

「……………」

吉野が瑚太郎と雑談をしたそうな目で瑚太郎たちを見ている。

……嘘だ。

「なんだ、楽しげな朝の会話には入ってこないのか」
「うるせえ」

「なんか、吉野君、サムライっぽい」
「そうか？」

「……」

「赤ジャケットの人の仲間っぽい」
「あー、なんとなくわかる。鉄斬る人な」

似てるかな？

「ちよつと口元緩んでね？ 嬉しいんじゃないか？」
「うぜえ。黙れ」

おつとチャイムも鳴ったし朝のHRが始まるようだ。
邪魔にならない位置に移動しておこう。

チャイムの直後に担任と思われる人物が教室に入ってきたが、生徒たちは席に戻らずに、雑談を続けていた。
皆の話題は一点。昨日来るはずだった、「転校生」についてだ。

「転校生さん、今日も来てないのかな？」

「センセーなりの演出じゃないかな」

「えー、気になるなあ」

「まあ、俺は昨日会ってるけどさ」

「え、そうなの？」

『中々の演技力です小鳥。演劇部にでも入ってみたらどうですか？』

他の人には聞こえないのをいいことに普通に小鳥に話しかける。
ちなみに小鳥にはできるだけ原作通りの行動を取ってもらっている。

何がきっかけで原作から外れていくか分からないからね。

「会ったつつつても坂で会って職員室まで連れて…
まだ職員室で会っただけだな」

「おー、じゃあ鳳さんのエスコート第一号は瑚太朗君だねえ」
「はっはっは。」

あれ？ 何で小鳥が転校生の名前しってるん？

小鳥はしまった、という顔をしているが時すでに遅し。

「え！？ それは…あれだよ！ アカシックレコードにアクセスしたんだよ！」

「そんなどうでもいい事でアクセスしちゃったのか！？」

『これはまた壮大に話を盛りましたね』

「で、本当のところは？」

「友達に聞きました……」

「友達！？ 小鳥って俺以外に友達いたの！？」

「むっ！ 瑚太朗君それはちよつと失礼すぎるんじゃないかい」

「私には友達の100人や200人……」

「マジで!？」

「…は言いすぎかも知れないけど、とにかく友達くらいいるよ！」

「へえ。それは知らなかったな。」

「ところでその友達って俺も知ってる奴？」

「……ううん。瑚太朗君は会ったことないはずだよ」

小鳥が微妙な表情になっている。

まあこの話題はちよつとまづかったね。

「はいみなさん。席に着いてくださーい。始めますよー」
「はい」

『小鳥。教室のようにたくさんの方がいる状況下で私と話したい場合、私に
伝えたいことを頭の中で念じてください。そうすれば私に伝わりますので』

と言ってみたら、小鳥がむむむっという感じで集中しだした。

『まあそんなテレパシーのような能力は私にはないんですけどね』
と私が付け加えると小鳥はずるっと椅子から滑り落ちた。

「情けねえほどボコボコにして、テメエ自身を転校生にしてやるのか？」

お、瑚太朗と吉野が注目を集めてくれていたおかげで椅子から滑り落ちる

シーンは見られることはなかったようだ。
だがしかし、小鳥がこっちを睨んできている。
さすがにちよつとからかい過ぎたかな？

『ちよつとしたお茶目な冗談ではないですか』

そう言うをやれやれ、という感じのモーションを取ったし許してくれたようだ。

「吉野くん、ちょーと静かにしてねー。ホームルームを始めます」

「ちッ、邪魔が入りやがる…」

ホームルームの出席確認が始まった…。またしても暇だ。小鳥に話しかける

ことはできるけど小鳥は喋れないからこっちが勝手に一方的に喋るだけに

なっちゃんし……。そうだ、いい事を思いついた！

『小鳥。暇なので何か話でもしましょう』

『小鳥は喋らなくてもいいので、ノートに小さく喋る内容を書いてください』

私の眼を持つてすればノートに書かれた内容を読むなど容易いことです』

>何ていう能力の無駄遣い！？　まあ私も暇だしそういうことならOKだよ<

よし、小鳥が乗ってきてくれた。

正直授業中に話せないんじゃないや暇だからね。

『では何の話をしましょうか？』

>じゃあ今話題になってる鳳さんの話でもどう？<
『いいですよ』

>そういえば篝ちゃんは鳳さんのこと知ってるの？<

『そうですね、知っているといえは知っていますね。』

>というところ<

『予知で見たので人となりについては多少は分かります』

実際にはゲームだけだね！

>へえ～。じゃあ鳳さんってどんな人なの？<

『そうですね、一言で言うなら天然さんですね』

>天然なんだ……<

『何でもない所で転んだり、人の後ろに着いていくだけで迷子になったり』

>おおう、そいつは予想以上の天然っぷりだね<

『ちなみにちはやは才力研に入部する予定なので、これ以上の事を知りたい』

場合は実際に本人を観察してみてください』

>観察て……<

『さて、そろそろちはやの紹介が始まりそうですね』

「じゃあ、ここで転校生を紹介しまーす。

昨日一日期待させちゃいましたかー？

ではみんな、拍手で盛大にお迎えくださいね。

じゃあ、転校生さん、どうぞー！！」

とよとよと色めく教室内に、今、ついに、ちはやが現る！

「天王寺くーん、ネタばれ厳禁ねー」

「…天王寺？」

瑚太郎が微妙に睨まれている。

どうやら小鳥もその事に気付いたようだ。

>瑚太郎君は何で睨まれているの？<

『そうですね…。話せば長くなる…こともないのですが簡潔に言う』

>言うって？<

『瑚太郎がいつものノリで接した所、第一印象が最悪になったみたいです』

> 良く分かったよ<

「じゃあ、元気よく自己紹介をみんなにね」

「て、転校生の鳳ちはやです…よろしく…」

「よつろしくー！」

名前の分からない男子生徒Aがハイテンションで返した。

「誰がホモだテメエ！」

「やべえ！ そうなったらお相手俺しかないじゃん！」

瑚太郎たちは相変わらずマイペースに騒いでいた。

> ところで瑚太郎君たちは何やってるの？<

『さあ？ いつものコミュニケーションじゃないですか？』

> それもそうだね<

「ちなみに制服については事情があつて、しばらくこのままだそうです。」

あまり深く詮索しないであげてね。

じゃ、席は…とりあえず、次の席替えまでは定番の一番後ろかしら」

「あ、はいです」

「じゃー、正面のほうが見やすいわね。」

えーと、天王寺君の後ろでいいかなー？」

「ええっ」

瑚太郎が席を後ろに少しずつ移動させてる。
まあ所詮無駄な抵抗なんだけどね。

「あら…よく見たら天王寺君の後ろつて、
スペースの空気が少ないのかしら？」

「じゃあ、吉野くん…」

吉野も瑚太郎と同じように席を後ろに移動させてる。
どっちにしろ瑚太郎の後ろになると思うけどね。

「あらら…？」

「しょうがないわねえ」

天王寺君の隣にしましょ。もう顔見知り
みたいだし、色々世話してあげてね」

「「ストーップ！！！」」

「な、なあに？ いきなり息ぴったりね…」

「いや、後ろ空けますから…」

「吉野君も席を元の位置に戻しておいてくださいねー。」

「じゃ、連絡事項を…」

先生が連絡事項を黒板に書いている間にどうやら例のあだ名？ を
瑚太郎が言ってしまったみたいだね。

「がたあつ！！！」

「ちはやが片手で机を持ち上げた！！」

「何と小鳥も現場を目撃していた。」

> えーと、今のは？ <

『言い忘れてましたが、ちはやはかなりのパワーファイターです』

> おう… <

『そつといえは小鳥、ホームルームが終わったら教室を脱出しますよ』
> なして？ <

『予知関係：とだけ言っておきましょう』
>予知関係か…。了解だよ<

ホームルームが終わると、早速生徒達がちはやの周辺に集まっている

『では教室を出しましょう』

小鳥がこくこくと首肯するのを確認し、教室を後にする。

小鳥は少し間を置いて出てきたので、
周りに人がいないことを確認して手を繋ぐ。

「ふう、これでようやく普通に会話ができますね」
「だね。私はちよつと腕が疲れちゃったよ」

おっと、それは考慮してなかった。

「すみません。私の暇つぶしが原因でそんなことになってしまっ
んて…」

「別に気にしなくていいよ。疲れたといってもちよつとだし、
ホームルームとかの場合だと私も暇だしね」

「そう言ってもらえると助かります」

「それで、予知関係って今から一体何が起きるの？」

「それはですね、瑚太郎がちはやに学校案内をします」
「それだけ？」

「ええ、それだけです？」
「なら私が教室を出る必要は無かったんじゃない……」
「甘いですね小鳥。大甘です。」

小鳥が教室に残っていたら瑚太郎は学校案内を小鳥に任せるでし

「よう？」

「あつ！」

「つまりそういうことです」

ここで小鳥が案内しちゃうと色々狂っちゃうかもしれないし。

「予知についてはとりあえず干渉しなければ問題ありませんので、面白そうですね。こっそりと二人を追跡してみませんか？」

「お主もワルよの」

「どうやら了解してくれたみたいだ。」

「では二人も教室から出てきたようですし、早速尾行を開始しましょう」

「らじゃー」

「元気よく返事する小鳥。どうやら小鳥も楽しんでいるようだ。」

「なんで、よりによってあなたなんですか」

「ですよー…はは」

「険悪な空気が流れている…」。

「鳳さん、あれが2・Bの教室ですよ」

「見れば解ります」

「ですよー」

「二人とも無言で進んでいく。」

「なあ、鳳」

「正直さ、俺も本当に悪かったって思ってるんだ…」
「その後の態度も悪かった。ちよつと改めるからさ…」

瑚太郎が振り返り。

「ごめんっ!」

頭を下げる。

「瑚太郎君は一体何をやってるのさ」

「瑚太郎もまさか今まで後ろに居た人が突然
いなくなっているとは思わなかったんでしょ」

こちらは和やかに談笑しながら進んでいる。

「いねえ!!」

「ようやく気づいたみたいですね」

「瑚太郎君……」

「おい、鳳っ」

「あつ! ど、どこ行ってたんですかつ」

「そいつは見事にこっちのセリフだな…」

何ですぐ後ろにくつついて来てて迷うんだよ」

「ちよつとよそ見してる間にいなくなってたのはそっちですっ。

うう… 果たしても屈辱です…」

「いやー、悪意はないんだけどさ」

瑚太郎思いつきり睨まれています。

「…行きますか」

「あ、待ってください」

「ん」

「あそこに見えるの、なんですか？」

ちはやが窓の外を指差す。

「ん、どれ？」

「ああ、ありや体育館だよ」

「たいいくかん…へー、そうなんですか」

「ちよつと珍しい形してるよな。でも中は割と普通だよ」

「そうですかー」。

「じゃ、さつさと案内してください」

「あ、はいよ」

すたすたと二人は別の場所に歩いていく。

「では、気分転換も済みましたし私はそろそろ帰るとしましょう」

「えー？ この後は見ていかないの？」

「小鳥……。覗きなんて趣味が悪いですよ？」

「先に誘ってきた篝ちゃんに言われる筋合いはないよ！」

「まあまあ、冗談ですしそんなにむきにならないでください」

「そっか…。確かにこんな中途半端な所で急に帰るなんて冗談だよ
ね」

「では小鳥、一旦さようならです」

「そこは冗談じゃなかったの！？」

暇つぶしはこのくらいにして、これ以上
引き止められる前にさつさと帰るとしよう。

……今日は帰ったら何をしようかな

10月05日(火) 籐ちゃん暇を持て余す(後書き)

もつと短くする予定が書き始めたら
かなりの長文になってしまいました:
今後はここまで長くなりそうだったら
途中で分割するかもしれません

10月06日(水) フーキン現る！

『暇なので、以下略です』

今日は寝過ぎしてしまったので、現時刻は昼休み間近だ。

>そこは略さないでちゃんと言おうよ...<

やっぱり今日も今日とて暇だったので小鳥に会いに、
そして瑚太郎観察のためにも学校にやっできてみた。

キンコーンカンコーン

『さて、チャイムも鳴りましたし恒例の

瑚太郎ストーキングを始めるとしましょう』

>しょうがないなあ<

よし、勧誘成功。まあ何だかんだ言っても毎回一緒に行ってくれ
し、

小鳥もやっぱり瑚太郎の日常生活が気になってるみたいだね。

あ、瑚太郎が早くも席を立てどこかに行こうとしている。

『もう瑚太郎は教室を出るみたいですし、
早く追いかけましょう』

小鳥が頷き、二人一緒に教室を出て瑚太郎の
ストーキングに移行する

「しまった、出遅れた…」

窓の外を眺めながら歩く瑚太郎。
そしてそれを追いかけるストーカーが二人。

「あ」

お、ちはやを発見したみたいだ。

「危険回避だな」

瑚太郎はもと来た道を早足で引き返し始めた。

「今のはどう見ますか、解説の篝さん」

何か小鳥が妙なノリになってる…

まあここは付き合っておくとするか。

「そうですね、今窓の外に居たちはやを発見したようですし、
危険回避という言葉から推測すると、恐らくはちはやに
絡まれて昼ご飯を食べそこなうという事態を想定したのでしょう」

「なるほど。的確な回答ありがとうございます」

「角を曲がったところで歩調を緩める瑚太郎」

「しかし、その背後には怪しげな影が……」

「何か篝ちゃんもノリノリみだいだね」

「何かも何も私は最初からノリノリですよ？」

「で、篝ちゃんはある子の事は知ってるの？」

「無論です。私の情報収集能力を甘く見ないでください」

「彼女は静流。未来のオカ研メンバーの一人で、高性能な後輩です」
「性格としてはやや素直すぎるかもしれませんが、中々いい子ですよ」

「なるほどねえ。あの子もオカ研メンバーなんだ……」

「ところで今まで聞いたオカ研メンバーって

女子しかない気がするんだけど……」

「ええそうですよ。ちなみにオカ研メンバーは総勢6人で瑚太郎以外全員

女子です。なので私の中ではオカ研は天王寺ハーレムという認識です」

「ハーレムなんか……」

小鳥がショックを受けているようだ。

「瑚太郎君えろえろだよ！」

小鳥の中での瑚太郎への好感度が下がった！

ぷぴー

調子はずれな笛の音がする。

ぷす。

今度はかすれた音。

「むむ……」

「ところであの子はさっきから何してるのかな？」

「笛の音で気づいてもらいたい気分なんでしょう……多分」

別に喋れない訳じゃないし、その辺が妥当かな。

「えーと…」

「何をしているんだいお嬢さん」

「むう…」

「見せてみな」

ちよつと待った、と手で示し、水道へ笛を洗いに行った。

「篝さん、今度の行動は一体どういことなんでしょうか？」

「一旦乗っておいて何ですけど、まだ解説ごつこを続けるんですか

……」

「しょうがないですね。えーとこれはあれです。笛を渡した瞬間に
瑚太郎がいきなり関節キス狙いで笛を嘗め回す事を警戒したんで
しょう」

「何かさつきから瑚太郎君への評価が酷くない!？」

「まあ本当のところは瑚太郎に渡す前にきれいにしただけでしょう」

「ぶーぶー。つまんなーい」

「小鳥は一体どういう解説を望んでいるんですか……」

「なるほど。お名前は？」

おっと、解説者ごつこをしているうちに話が進んでいたようだ。

「静流だ」

「身長は？」

「……」

1、4、9と両手で表す。

「体重」

「……」

3、9と両手で表す。

「スリーサイズ」

「むむむ……」

「瑚太郎君……」

体重とスリーサイズを聞いてしまったことで
小鳥の好感度がさらに下がってしまったようだ。

「ね、素直ないい子でしょう？」

「確かに素直ないい子んだけど、私としては危機感を覚えるよ」

まあ確かに普通の子なら心配だけど、実際静流に勝てる奴なんて
ほとんどいないだろうしなあ。

「大丈夫です。静流はかなり強いですから」

「強いって一体どのくらい強いのか？」

静流の強さか……

とりあえずかなり強いということしか分からない。

「まあとりあえず、ちびもすを1とするなら……」

「するのなら？」

「100くらいなものではないでしょうか？」

実際どうなんだろう？

まあちびもすよりは圧倒的に強いんだろうけど。

「ええ！？ それはちよつと強すぎない？」

「ちびもすは普通の人じゃ倒せないくらいは強いんだよ？」

まあ本当のことなんだけど、静流がガーディアンの人だと
ばれると色々面倒そうだし、ここはいつもの冗談ということ
にしておくかな。

「まあそれは冗談としても、静流は護身術をやっていますし、
大人の男が襲ってきてても普通に返り討ちにできますよ？」

この程度なら一般常識の枠内に収まるだろう。

「もう！ 篝ちゃんは私に嘘をつきすぎだよ」

「まあまあ、冗談を言い合えるほど仲がいいと
いうことだし良いことじゃないですか」

「それはそうなんだけどね…」

「ではこの話おしまいということだ」

「うーん。何かちよつと納得いかないけどまあいいや」

ふう、何とか納得してもらえたようだ。

「それにしてもあんなに小さいのに大人の男でも

返り討ちにできるなんて人は見かけによらないねえ」

「まあ私だったら軍隊レベルでも返り討ちにして見せますが」

「篝ちゃん、妙な対抗心出して余計な事はしないでよ？」

「失敬な。私は戦闘狂ではありませんし、世の中平和が一番です。」

見つかってしまった場合は正当防衛くらいしますが、自分から攻めるなんて……攻めるなんて……多分しません」

「そこは断定してほしいんだけど……」

「まあそこはケースバイケースです」

「お庭でおべんとー食べよう。ふたりで」

「変わった罰則だな？」

「むづ……」

小鳥と話している間にまた大分話が進んでるね。

「小鳥と話している間にいつの間にか静流が瑚太郎をデートに誘っているようですね」

「だねえ。全く瑚太郎君も隅に置けないよ」

「ひょっとして、最初から俺を誘うつもりだったんじゃないか？」

「まあ、別にいいけど」

「じゃ、行くか」

静流が瑚太郎の方をちらちら見ている。

「どうしましたか静流さん」

「……」

とことこと瑚太郎の後ろについていく。

「ああいつのを見ていると和みますね」

「そだね」

「じゃあ十分和みましたし、私はそろそろ帰りますね」

「そだね」

「あれ？　今回は随分あっさり引き下がりましたね」

「これ以上覗き見るのは野暮ってもんさね」

「それもそうですね」

「じゃあまったね」

「はい、ではまた家で会いましょう」

……さて、もう少ししたら小鳥が才力研に誘われるはずだし、
ようやく退屈から解放されそうだ。

10月07日(木) デートの尾行は基本です

『もう何も言わなくても分かりますね』

いつも通りの暇つぶしタイム！

小鳥はやれやれ…という風に嘆息している

もう放課後だし今日は来ないと思っていたんだろうけど、そうは問屋が卸さない！

「瑚太郎」

『今ノートで会話するというのが難しいでしょうし、しばらくは勝手に解説でもしてますので適当に聞き流しておいてくださいね』

「よ、呼んでるんですけど!？」

「あ、いやー」

『どうやらいきなり名前で呼ばれたので少し戸惑っているようですね』

「で、なんですか…」

「…鳳さん」

「なんなんですかさっきからその間は」

「様々な葛藤がね…」

「? まあいいです」

『ちはやを名前で呼ぼうとしたところ名前を忘れていたというところでしょうね』

「なんだね」

「…やっぱりいいです」

『さつきしばらくって言ったばかりで何ですが、一人解説はやっぱり虚しいので、そろそろ一緒に観察を始めませんか?』

こくこくと頷く小鳥。

『ありがとうございます小鳥』

「じゃねー、コタさん」

「あれ、小鳥もう帰るの?」

「うん…ちよつとね」

そうそう。ちよつと瑚太郎観察の時間になっちゃったからね。

「…あ」

「えーと」

どうやらちはやは小鳥に話しかけたいようだ。

「?」

「小鳥に挨拶がしたいみたいだよ」

「いちいち解説なんていりませんっ!　すぐ挨拶するんですからっ」

「ん、鳳さん…じゃあね」

「さ、さよなら…小鳥さん」

「え」

やっぱり最初から名前で呼ぶのは、

学校とかに行ってなかったからかな？

「ほら、小鳥さんは、さよなら小鳥さん、と挨拶をされました。やり直しでもう一回」

「えーと…ちはやさん？」

「はい」

『ここは親しみを込めてあだ名で呼んでみましょう』

『そうですねえ……。チエリーちゃんとかどうでしょう？』

「じゃあ、ちーちゃん」

見事にスルーされた…。

あだ名の中にある悪意を読み取られてしまったのかな？

「んで、小鳥はもう帰宅？」

「うん、ごめんね」

「俺この後どうすりやいいのさ」

「あ、じゃあちーちゃんに街の案内でもしてあげたら？」

「あ、そう、そうです。昨日も瑚太郎がそう言っていましたし、折角ですから付き合っただけても」

「そついう態度なら行かない」

瑚太郎はN oと言える日本人でした。

「え、ええーっ」

「…ところで、瑚太郎さん？」

「はい？」

「瑚太郎って呼ばれてる？」

「呼ばれてるが何か」

「ほっほー」

「じゃあ、ふたりに行ってくる事ー」

「じゃね、ちーちゃん」

「あ、はい。さよならです」

「おーい、なにそれ!？」

小鳥が教室を出たので、廊下で手を繋ぎそのまま教室の中へ潜入。

「あーもう…」

「うーむ」

「小鳥のやつに体育の時間、組む相手が出るな…」

「む、失礼な。私にだって組む相手くらいいるよ!」

「小鳥、今話しかけても瑚太郎には聞こえませんよ」

「それにしても小鳥に組む相手がいたとは以外でしたね」

あ、まさか先生などというオチではありませんよね？」

そう言つと小鳥はだらだらと汗かきはじめた。

「まさか図星なんですか？」

「あ、瑚太郎君が教室を出ていくよ。早くおわなきゃー」

「話を誤魔化しましたね」

「まあこれ以上いじめるのも可哀想ですし、この話は

ここまでにして二人の後を追いましょう」

昇降口を抜けていく瑚太郎とちはや。

だがどうやらちはやの方が遅れているようだ。

「ま、待ってください! 早いですっ!」

「あ、わいい」

「エスコート対象の歩幅に合わせていない。減点1ですね」

「今回は審査員風なんだ……」

「ええ、毎回同じでは面白くありませんからね」

「どうでもいいけど転ぶなよ」

「そつ、そんな心配してもらわなくても大丈夫ですつ」

「だってなあ……」

「これまでののはたまたまですからっ」

「今日も見事に夫婦漫才をこなしてますね」

「そだね〜。傍から見てると仲良しさんにしか見えないね〜」

「あれ？ 何か二手に別れたよ？」

「多分またちはやの天然スキルが発動したんでしょう」

「うおーい！」

ちはやが居なくなったことに気付いた瑚太郎がダッシュで追いつく。

「あ、は、はい？」

「いいか、鳳：お前の目と心は濁り曇っていて見えないのかもしれないが」

「何だか偉い言われ様な気がしますけど……」

実際これはちはやが天然だから軽く流してるけど、ちはや以外に言ったら一発でアウトだと思う。

「校門はあっちだ」

「はい、知ってます」

「じゃあお前は下校するんじゃないのか」

「しますけど…」

「今日は自転車なんです」

「自転車通学です」

「なるほど…確かにそれならば校門に向かう必要がないのは頷ける」

「ですよー。瑚太郎は早とちりで困りますね」

「だが駐輪場は逆方向だ」

「朝自転車を止めに行ってるはずなのに

場所を間違えるとはさすが天然さんです」

「あ、今思いついたんですがちはやのあだ名には天然さんとかどうでしょうか？」

「篝ちゃん……。さすがにそのあだ名は酷いと思うよ」

「そうですか……。いい案だと思ったのですが」

「全く鳳さんは方向音痴で困りますね！」

「ううっ…」

「…そういう言い方するから、私はあなたが嫌いなんですっ」

「そりゃ、どーも。んじゃ今日はこれにて解散か」

「ええっ…」

「…冗談」

「……」

「ほら、むくれてないで行きましょうよお嬢さん」

「…はい」

「おっと、ちょっと設定を忘れかけていました。
今のは減点2ですね」

「審査員の篝さん、ちなみに今回はどういった
部分が減点ポイントだったのでしょうか？」

小鳥もどうやら乗ってきてくれたみたいだ。

「今のはちはやに意地悪をしたからですね。好きな子に意地悪をして許されるのは小学生までです」
「なるほど。参考になります」

「なるほど。ちょっと小洒落た良いシティサイクルだ」
「じゃ、行きましょう」

「待て、俺は？」

「ダッシュでいいんじゃないです？」

「…案内って、どっちのほうまで？」

「田園のほうまで行ってみたいですねえ」

「あはは」

「帰るわ」

「えええっ、こ、ここまで来たんですからっ!!」

「お前は俺に何キロ走らせる気だ」

「っ…」

「仕方がない。ここはひとつ…あんまり良くないが」
「ひゃっ」

瑚太郎が自転車の後ろに跨る。

「どうやら今日はここまでのようですね」

「え？ どうして？ 篝ちゃんなら自転車
くらい私と一緒に余裕で追えるよね？」

まあ小鳥と一緒にだろうと自転車を追うくらいは余裕なんだけど…

「そうですね。小鳥を抱えていけば追跡は可能です」

「じゃあどうして？」

「小鳥。よく考えてください」

「今私たちは普通の人には見えない状態です」

「そうだね」

「その状態で自転車並みのスピードで道路を走ってたら
通行人や車などが危険です」

「あ！ 確かにそれは危ないね」

「分かってくれたようですね」

「という訳ですし、今日は一緒に帰りましょうか」

「ごめんね簀ちゃん。今日は瑚太郎君用にハーブを買いに行く予定
なんだ」

「あれ？ 瑚太郎用のハーブはこの前買いに行つてませんでしたか
？」

「そうなんだけど…。何か今日聞いた話だと

瑚太郎君心霊現象に悩まされてるみたいだね」

「ごめんなさい。犯人は私です。」

「なるほど…。それで心霊現象に悩む瑚太郎の為に

何か良さそうなハーブがないか探しに行くわけですね」

「そういうこと」

「そんな訳なんで私は寄り道してくから先に帰ってきてくれる？」

「そういう理由なら仕方がないですね。では私は先に帰るとしまし
よう」

「では小鳥。一旦さようならです」

「うん、また後でね」

……さて、小鳥と一緒に帰宅計画も潰れてしまったし、
一人寂しく帰りますか。

10月08日(金) 委員長は辛党？

「では小鳥、行きましょうか」

今日も今日とて退屈しのぎに学校にやって来た。

いつもと違うのは不可視状態じゃない点と、後は

小鳥と昼食と一緒に取る約束をしていた事くらいか。

なので今は小鳥と一緒に普通に廊下を歩いて学食を目指している。

ちなみになぜ不可視状態でないかというと、注文しておいた

制服が届いたからだ。まあ制服さえ着ておけば不可視状態

じゃなくても大丈夫なはず…。

「小鳥。妙な視線などは感じませんか？」

「私は何も感じないけど？」

「そうですね。私も特に視線は感じませんし、制服さえ

着ておけば特に怪しまれる心配はなさそうですね」

「そうみたいだね」

「では、混雑に巻き込まれない為にも早めに学食に向かうとしますか」

「らじゃ〜」

少しは怪しまれたりするかな〜と

思っていたけど特に何事もなく食堂に到着。

「天王寺瑚太郎おおおおお！！」

列にちゃんと並べ。ズル込みは許さない、秩序は私が守る、制裁する！」

食堂の中に入ったら、ちょうどルチャが

瑚太郎に説教をしているところだった。

それにしても割り込みくらいで鉄拳制裁なんて苦情は出ないんだろ
うか？

もしかしてこの学校の男子って全員M？

「おわー。委員長過激だねえ」

「ですね。それよりまだ瑚太郎には遭遇したくありませんし、

瑚太郎に見つからないように気をつけてもらっていいですか？」

「OKだよ」

「い、いえいえ並びますよ、はいはいはいはい」

実際に床に転がっている生徒を確認したからか、
瑚太郎は物凄い低姿勢でルチアに対応している。

「委員長は学食派なのか？」

あれ？ 弁当の時もあるよな」

「気が乗らなかつたり、体調が悪い時には

弁当を作らず、学食に頼ることもある」

「なるほどな。先日が続いてまた学食ってことは、

ここ数日は体調が悪いつてことだな」

「お前、長引く性質なのか？」

お腹は冷やすなよ。ホウレン草がいらいしいな、鉄分を欠かすな
よ。

ヘソの少し下くらいのところに、痛みを和らげるツボがあるらし
いぞ。

押してやろうか」

「んな、な、なななな…何の話をしているんだああああああ！
！」

瑚太朗が思いっきりぼこぼこにされてる。

「瑚太朗君……………」

またしても小鳥の好感度が下がったようだ。

まああれだけ堂々とセクハラ行為をやってたらしやうがないか。

「それにしても瑚太朗はわざわざルチアを怒らせたりして
ますが、もしかしてルチアに殴られたいんでしょうか？」

「うーん…。幼馴染としてはさすがに
そんな事ないと思いたいんだけどねえ…」

「ハイ、次の人！ 注文は何！？」

「おっと、私たちの順番ですね。小鳥は何にしますか？」

「うーん。今日はカレーでも食べてみようかな」

「分かりました。すみませんカレーを二つお願いします」

「あいよ！ あら？ 小鳥ちゃんが来るなんて珍しいね」。

よし、ちよつとサービスで量を多くしておいたから、

いっぱい食べておくれよ」

「ありがとね、おばちゃん」

「何、いいってことさね。」

ハイお待たせ、次の人」

カレーをゲットしたので、どこかに空席はないかなと思って
探してみると、二人組がちょうど食事を終えたようだ。

「ちょうど二人分席が空いたみたいですし、あつちに座りましょう」

「あ、本当だ。ちょうど席が空くなんて運がいいね」

という訳で無事に席をゲット。

「あー、ズル込みだあああああ!!」

「何い! 誰だ、ズル込みをしたのは...!!
法を遵守できぬ者には正義の鉄槌で思い知らせてやる!」

席についてカレーを食べ始めようと思ったら

瑚太郎の叫び声が聞こえてきた。

「何か瑚太郎君が叫んでるみたいだけど割り込みなんてあった?」
「いえ、別に割り込みは発生していませんよ」

確かこの隙にルチアのカレーに細工でもするんだったっけ?

「カレーを置いたまま、治安維持活動に向かうルチア...」

しかし、そのカレーに今まさに魔の手が迫ろうとしていた...

「篝ちゃんは一切誰に喋りかけてるのさ...」

「まあまあ、今回はちよつとナレーション風に言ってみただけです。
それよりほら、瑚太郎の方を見て下さい」

「ん? 瑚太郎君がどうかしたの?」

小鳥が瑚太郎の方を向いた時、ちょうど瑚太郎が
ルチアのカレーと自分のカレーとを交換していた。

「篝ちゃん、瑚太郎君は一切何をやってるの?」

「ルチアの食べかけのカレーが欲しかったんじゃないですか?」

「冗談はいいから」

笑顔のはずなのに何か怖い.....

「まあ今のは冗談ですが、今までの瑚太郎の行動を見ている限り、

有り得ないと言うほどの考えではないと思いますが？」

「う…。確かにその可能性は否定できないね」

ついに小鳥も底い切れなくなったみたいだ。

「それで話を戻すと、さっき瑚太郎は特製の激辛カレーを頼んでいたようですし、ルチアが激辛カレーに耐えられるかを試すつもりでしょう」

「なるほどね。そういえば委員長は」

かなりの辛党だって噂を聞いたことがあるよ」

「そういうことです。あ、ルチアが席に戻ってきましたよ」

ルチアが席に戻りカレーを食べ始めるが、特に何事もなく淡々と食べているようだ。

「何か委員長普通に食べてるんだけど…。あれ本当に激辛カレーなの？」

「ええ、瑚太郎も受け取った後に味見してたみたいですし、常人に耐えられる辛さではないはずですよ」

味覚があるなら普通に気づくだろうね。

「どうやら食べ終えたようですネ」

「みたいだね」

ルチアが涼しげに完食してしまったため、

瑚太郎が何ともいえない表情で様子を見に行った。

「よ、…よう、委員長。今食べ終わったところか？」

「……て、天王寺!？」

「そうだが、……わ、悪いかな？」

「私がカレーを食べてると、……そんなにも可笑しいかな……!?」

「まさか、また誰かのカレーと入れ替わった？」

「そんなはずはない！ 味見もした。ずっと監視した！」

「誰かのと入れ替わったなら、その人間が憤死してるはず……！」

「間違いなく委員長は17辛を食ったはずなんだ！」

「な、……何だ。わ、私がカレーを食べるのが、

そ、そんなにおかしいか……!?」

「おかしい。舌か頭のどっちかおかしい」

「失礼だ、まったくもって失礼だ……！」

「女の敵！ 天王寺瑚太郎おおおお！」

ルチアの凄まじい威力のアップーにより瑚太郎はダウンした。

「今回も瑚太郎の自業自得ですね」

「これは私もさすがに底い切れないよ……」

ダウンした瑚太郎を尻目にカレーを食べる。

「学食は安い代わりに味が良くないと聞きましたが、

ここのカレーは中々おいしいですね」

「何でもうちの学食には色々な種類の店の料理人が
いるらしいからね。料理がおいしいのは当然かも」

「なるほど、それならこの味も納得です」

「今後たまには学食で昼食を取ってもいいかもしれませんね」

「そだねー。たまには弁当以外もありかも」

「そうこう言っているうちに無事完食。」

「さて、今日は制服での潜入兼昼食に來ただけですし、もう帰りま

すね」

「うん、またね」

「では小鳥。一旦さようならです」

「ふ、……不潔不潔不潔……」

「またしてもまたしても、私のお皿を私のお皿を……」

「まあ待て。この命懸けの実験で得られた科学的実験結果を聞け」

「……そうか、命に未練はないのだな。」

不潔不潔不潔、変態変態変態！！ 馬鹿馬鹿死んじやえ、

天王寺瑚太郎おおおおおおおお！！」

……何か後ろで瑚太郎がぼっこぼこに
されてるけどまあ気にせず帰るとしよう。

10月09日(土)

ラスボスさんの遭遇

……ついにこの日がやって来た！

今日は小鳥から、オカ研に誘われたという連絡があったので制服に着替えてオカ研部室にやって来た。

「どんな有望な情報を得られるか、お手並み拝見といったところね」
「む……。ブログ……」

やって来たんだけど……

「……完璧じゃないか。……これだ」

そう言うとお太朗はブログをいじり始めた

「ただいまっ」

ようやく小鳥が帰ってきたようだ。

「遅いですよ小鳥」

「あ、篝ちゃんいらっしやーい。思ったよりも遅かったね」

「ええ、ちよつと制服に着替えるのに手間取ってしまった」

「なるほどねえ。あ、そういえばお太朗君

たちとの自己紹介はもう済んだ？」

「いえ、まだです。部室に入ってきてみたら小鳥はいませんし、

二人はさつきからあの調子で全然私に気付きませんし……」

「そうなんだ……」

本当、自己紹介のタイミングを見失ってしまった。

「まあ自己紹介は二人が気づいたらすればいいとして、とりあえず私にもお茶を下さい」
「りょかい。はい、どうぞ。熱いから気を付けてね」
「ありがとうございます」

小鳥に手渡されたお茶を飲む。

うん、中々おいしい。やっぱり朱音の財力のお蔭だろうか？

「ところで瑚太郎君は何してんの？」
「何かブログをいじってるみたいですよ」
「なるほどねえ。じゃあ邪魔しない方がいいのかな？」
「そうですね。区切りがついたら気づくでしょうし、しばらくは何か別の事でもしてたらどうですか？」
「ふうつ、これで大体大枠はできたな」

お、思ったより早く瑚太郎の作業が終わったみたいだ。

「あれ？ 小鳥いつの間に帰ってきてたん？」
「うん？ 今さっきだけど？」
「集中してたからか全然気づかなかったわ」
「本当、瑚太郎は無駄に集中力が高いですね」

瑚太郎が全然気づかないので、こちらから話しかけてみた。

「えーと、どちら様??」

どうやら記憶が戻る気配もないようだし、

瑚太郎とは直接会っても大丈夫のようだ。

「そつえば私たちは初対面でしたね。私は篝。小鳥の親友です。ちなみにあなたのことは小鳥によく聞いています」

「あ、これはどうもご丁寧に。」

「ってそれはいいとしていつの間にここに!？」

「普通にドアから入ってきたんですけどね。二人とも集中していたみたいですし、気づかなかったんでしょう」

「天王寺、煩いわよ」

瑚太郎が大声で騒ぎすぎたので朱音も集中が切れたようだ。

「……何か増えてるわね」

「あ、どうも初めまして。小鳥の親友の篝です」

「……千里朱音よ」

「……天王寺、確かに好きにしろとは言ったけど……」

「え、違います違います。確かに小鳥は俺が連れてきましたが、

この子は今さっき勝手にやってきたんです」

「そうなの？」

瑚太郎が弁解すると朱音が私に問いかけてきた。

「ええ、小鳥から部活を始めたという報告を受けたのでどんな所かな」

「と思って来てみました。後は何か面白そうな気配がしていたので」

「面白そうな気配って一体どんな気配よ……」

「まあまあ、そう深く考えずに。それより小鳥が入部するなら私も活動に参加してみたいんですが……」

「ちゃんと天王寺が責任を取るならかまわないわよ」

「では決定ですね」

朱音とがしつと握手をする。

責任を瑚太郎に押し付けることで何とか交渉が成立したようだ。

「なあ小鳥…」

「どうしたの瑚太郎君？」

「何か俺の意見を全く聞かずに話が進んでるんだけど…」

「気にしない気にしない。それに、私としても篝ちゃんと一緒にの方が楽しいし、できればお手伝いを認めてあげて欲しいんだけど…」
「そっか。まあ小鳥がそこまで言うなら…」

どうやら瑚太郎の方は小鳥が説得してくれたようだ。

「ナイスです小鳥。これで私も晴れてオ力研の一員ですね」

小鳥とハイタッチを交わす。

「さて、では自己紹介も終わりましたし、部活動を進めましょうか。確か今はブログを作成してるんですよね」

「ああ、とりあえず大枠は出来たんだが…」

「こんな感じで問題ないかな？」

「では私たちが批評してあげましょう」

「そだね。どれどれ見せてみ瑚太郎君」

小鳥と一緒に画面を覗いて見ると、おどろおどろしい雰囲気の写真が表示されていた。まあデザインはいいんだけどねえ。

「へー、雰囲気出てるだね」

「ええ、雰囲気は出てますね」

初心者にはよく出来ているとおもう。
瑚太郎はこういうセンスはあるようだ。

「大枠はこんな感じかなって思うんだけど、どうだ？」

「うーん、ちよっぴり読みにくいかも。」

黒バックに赤字だからかな」

「そうですね。ホラーっぽい雰囲気欲しいのは分かりますが、目が疲れやすい、読みにくいでは

せつかく訪問した読者も逃げてしまいますよ」

「でも才力研なんだし、ホラーっぽい感じは外せないと思うんだが……」

「じゃ文章を少なくするか、文字サイズを大きくしたら？」

「ブログで文章減らすのはちよつと……」。

でも文字サイズは大きめにした方がいいのかな」

「あと全体的にゴチャつとしてる。もちーと見やすくした方がいいかも」

「え、具体的には？」

「だからね、こことか……」

「ここも少しいじった方がいいんじゃないですか？」

わいのわいの。

30分もやってると、なかなか見栄えが整ってきた。

「……形は整ったんじゃないか？」

「うん、立派なブログだ。どこんちにやっても恥ずかしくないブログだ」

「それは少し言い過ぎだと思いますが、素人が作ったにしては中々見栄えが

するものが出来ましたね。これで後は瑚太郎の文章力次第で、駄目ブログ

にも良ブログにもなりえますね」

「おお、篝ちゃんからもいい評価を貰えたよ！
じゃ、アップロードしちゃいなよ」

「いや、記事がまだだ」

パソコンの画面を見ると、文字が全て、おむつ、で埋まっていた。

これをアップしたらある意味では話題になるかもしれないけど……
というか何でおむつ何だろう？

瑚太郎はおむつに思い入れでもあるのだろうか？

でも何か聞くのも怖いしここはスルーしておこう。

「どんな内容にするのかは決まってるの？」

「まずは挨拶と…ネタ募集。このふたつだな」

「ブログなんだし気楽に書いたら？」

「そうですね。とりあえず書いてくれれば私たちも意見を出せます
し」

「でも」

何か瑚太郎がもじもじしだした。

男がやると少しイラっとくるね。

「どしたのさ」

「…照れくさい」

「男は度胸。とりあえず書いちゃえばいいさ」

「心の準備が」

さらにもじもじしだした。

イラっ

「それじゃいつまで経ってもブログ始まらないと思う。細かく更新しないといけないし、最初からためらってちゃいけないよ」
「でも、だって。人に見られたら恥ずかしいし。それに下手なことを書いてブログ炎上しちゃったら 困るしさ…ははっ。だから記事アップは来週…いや来月くらいを目途に検討に検討を重ねて…」

小鳥が満面の笑みを浮かべた。

昨日の食堂でも浮かべていた怖い笑みだった。

「おせーよタコ」

「ひいっ」

「うじうじしない、もじもじしない。うじもじしないっ」

「うっ…」

「お書き！」

「お書きますっ」

早っ！

もう書き終わっちゃったよ。

「書き終わりましたっ」

「お上げ！」

「お上げますっ」

あーあ。推敲もせずにアップロードしちゃったよ。

うん、この後の展開は知ってるけどあえて何も言っまい。

「どわーっ、何も考えずに勢いだけで書いてアップしちゃった！」

「それでいいんだよブログなんだから」

「どれ、読んでみようっ」と

「私にも読ませて下さい」

瑚太朗が席を空けたので、小鳥と一緒にアップされたばかりのブログに目をやった。

はじめまっぴー、オカ研特命隊長の天王寺でっす

このたび、我がオカルト研究会（通称OKAKEN）は活動を再開することになりましたーっ

わーどんどんどんぱふぱふっ！

めでてー！ マジめでてー！ マジと書いて本気と読む！

心身気鋭のブービーたちを中心として再結成されたOKAKEN！
風祭市にある様々な都市伝説を海綿…解明じゃボケエ！ アホがあ！
こなん頼りない特命隊長から、読者諸君にひとつお願いだ
身近で見聞きした様々な疑問や事件を俺たちに教えて欲しい！

これはというネタは、オカ研の精鋭調査団がきっちり調査する！
気合いの入ったネタを期待するでおじゃる！

以下の投稿フォームから、すぐにアクセスするオカよ！

………ないわ。

「ど、どうかな？ 俺、どんな文章書いたっけ？ 勢いに任せ
すぎてちよっと細かく記憶してはいないんだよ、例によって」

「瑚太朗君、このブログ…。これはちよっと…なんてったらいいの
か…」

「うん？」

「すつつつごく楽しいねっ」

「まじで？ やった！ 勝てそう？」

「勝てる勝てる。もうこの時点で勝ち終わってるようなものだよ」

「おいおい、勝利終了済とはほめすぎだぜ。自身つきすぎちゃうだ
ろー」。

登らせるなよ、誰の心にもそびえるピノキオ天狗山脈を」

「自信を持つのはいいことさ」

「まいったな…勢いに乗れたとは思ってたけど、そんな会心の出来だったとは」

「隠れた才能が噴火しちまったのかな」

「瑚太朗君の文才に小鳥さんびっくりだよ。あまり家に帰ってこない瑚太朗君のご両親も会社でエクセレントって叫んでゴーゴー踊ってるよ」

「しゃーねーなーもー!」

メモ帳にペンを走らせる。
サインのつもりだろうか？

「サインの練習しないと…」

「氣い早すぎっ」

「おおっとお！ そりゃそうだあああっ」

「……」

「…そんなに凄いデキだというの？ そこまでの文才があのアホに……」

どべっ

朱音は突っ伏した。

「おや千里さん、どうなさいましたかな？」

「吐き気がしてね……」

「私は頭痛がします……」

「そりゃいかん。私の作成したウェブサイトでも見て、心を慰めると良いですぞ」

「死者も甦るといふ会心のオモシロサイトと評判だね」

「確かにサイトの内容に突っ込みたくて死者も甦る可能性はありま

すね」

「…数年後に読み返して、恥ずかしさのあまり自殺したくなればいい」

あまりにも酷い出来について皮肉を言ってしまったが、
どうやら気づいていないようだ。

「どうやら今この場でまともな感性を持っているのは私たちだけのようね…」

「ええ、そうみたいです。瑚太郎は

ともかく小鳥まで感性が残念だったとは…」

「で、物凄いはしゃいでいるみたいだけどこの二人どうしようかしら？」

「まあそのうち収まるでしょうから、とりあえず放置でいいと思いますよ」

「それもそうね」

一緒にサイトを酷評していたら、朱音との間に妙な連帯感が生まれた。

「さつて、サイトも作ったところで資料整理の続きでもするか」

「あたしもやる」

「長い道のりだ。のんびり急ごう」

「うん、ゆっくり焦ろう」

「では二人とも頑張ってくださいね」

「あれ？ 篝ちゃんは手伝ってくれないの？」

「私は旧才力研の資料には興味ありませんので」

「そっかあ。それじゃあ仕方ないね。」

二人で頑張ろっか瑚太郎君」

「そうだな」

「だるうう…これが気疲れってやつか」

「さすがにちよつと疲れたねえ。お茶いる？」

お、小鳥たちが休憩に入るみたいだ。暇つぶしに部室の本を

読んでいたら、いつの間にかけつこうな時間が経っていたようだ。

それにしてもいつの間にか小鳥がお茶くみ係りになってる気がする。まあ自分で入れるのは面倒だから助かるけど。

「くれ」

「私にもお願いします」

「会長さんは？」

「私はいいわ」

「はい瑚太郎君、篝ちゃん」

「サンキュ」

「ありがとうございます小鳥」

「ちょうど六時ね。六時半には帰宅しないと

いけないのよ。貧乏人は六時半帰宅よ」

「金持ってたらルール破ってもいいみたいない方しなくて下さい」

「金持ったやつがルールを作るのよ」

「さて、ブログ誰が見てくれたかな」

どうやら今の発言は聞かなかったことにしたようだ。

「更新された部だけが自動的に一覧されるスレッド形式に

なっているから、何人かは見たかもね」

「ちよつとときどきするね」

「私は違う意味でときどきしています」

炎上のなごき感だね。

「よし、投稿があつたかどうかチェックだ」

瑚太郎がノートパソコンを起動し、サイトを確認しているようだ。

「おおおっ！」

「どうした！」

「もう投稿が来てる。一通」

「おー。ファンが！ ついに！」

「…いや、ファンじゃないだろ、ハハハ。

ま、ファンだとしても会員番号は第四号だな」

「あたしと篝ちゃんと会長さんが トップスリーだもんね」

「お待ち…」

「ああっ！」

「どうした」

「サインの練習しとかなきゃだよ！」

「ってオイ！」

「しもうたー、ボケてもうたーっ。ファン効果侮りがたしだよ」

「こいつめっ」

「きゃーっ」

うつきゃうつふ。

「…バカップル…猿のつがいが…」

「このテンションはちよつときついですね…」

さすがにこのテンションに割り込むのはきつそうだし、
ここは朱音と一緒に静観しておこう。

「読んでみようぜ！」

「FU〜！」

何これ、占い部？（笑）まじうけんだけど（笑）じゃ試験で必勝のおまじないを教えろ！（笑）けど勉強はしたくねえ！（笑）勉強なしで俺を学年トップに押し上げてみるや腐れ才力研ども！（笑）

「…超許せねえ」

「からだに勉強させてやろうかい」

小鳥も満面の笑みを浮かべて、怒りをあらわにしていた。

「潰しだなこいつ…」

「でも瑚太郎君、暴力はだめだよ」

「そうだな。俺も電撃退学はしたくない」

「言葉の暴力ならいいだろう」

「それなら平和だねっ」

「……………部室のトラブル8000円…」

朱音は来るべき面倒ごとを想像して先に釘を刺してきたようだ。

「会長、お願いがあるんですけど」

「…内容は予想できるけど、何？」

「こいつ倒したい」

そう言って掲示板で投稿してきた例の一年生を示す瑚太郎。
どうやら釘を刺した意味はなかったようだ…

「…だろうと思ったわ。確かに問題ある書き込みのようだけど、問題にする」

には少々パンチ不足ね。明確な誹謗中傷をしたとかなら、正式な手順で

嚴重注意に持って行きやすい。けれどこれでは」

まあこのくらい掲示板とかではよくあることだしね。

「でも絶対なめてますよ」

「お前たちはまだなめられて当然の時期よ」

「いちいち過剰な反応をせず、まずは受け入れなさい」

「えー、泣き寝入りですか？」

「掲示板なのだから、返信をすればよろしい。こういった

愉快的な書き込みをうまく捌いてこそ、ネット上級者というもの」

「ネットに上級も下級もねえでしょ…。…返信ねえ」

「瑚太郎君、文才あるからいけるかも」

「そーかあ？ 俺いけるかなあ？」

「いけるいける。よっ、プレジデント！

今日もニクイ大統領風、吹かしてやがるねえ」

「しょーがねーなーもー！ じゃここはひとつ、軽く流しとくかな」

「軽くね。大人の対応で」

「わかってる、DS大人の対応って感じで行く。勝利の祝いには、

純正タッチペン用意しといてくれよな、小鳥」

「うん、お任せだよ」

「よし、返信だ」

「それにしてもこのテンションにはちょっと付いていけそうにありませんね」

「そうね。早く普通の状態に戻ってくれと良いのだけれど…」

小鳥たちは今ちよつと絡みにくいので、
朱音と話でもしながらテンションが下がるのを待つとしよう。

「大人だねえ。惚れ惚れすらあ」

「いやさ、俺って、大人びてるから」

「よくそこまで正反対の自己評価を…」

「さ、今日は上がるか」

「あ、またすぐカキコされた！」

「え？ 誰？」

「同じ人みたいよ？」

「すげー早いな。張りついてんのかこいつ？」

霊が強襲って（笑）バツカじゃねえの？（笑）

俺はテストで点取れるおまじない教えろつつったんだよ

「だめ瑚太郎君、自分に負けちゃだめだよ」

「グ…グオ…」

「あかん」

「…えいつ！」

「…グウウウ！」

「あまりきかない。だめかも…。こうなったら…篝ちゃん助けて」

「任せなさい。この一年生は少し調子に乗りすぎ

ですし、私が社会的に抹殺しておきましょう」

「ダメ、シャカイテキニマツサツ、ヨクナイ…」

「あれ？ 思っていたよりも冷静……」

「イマノオレ、トメルニハ、コイツノチ、ヒツヨウ」

「ではありませんでしたね…」

「しょうがないですね。このままでは危険そうですね、

私が物理的に黙らせてあげましょう」

「物理攻撃は止めてあげようよ篝ちゃん…」

「そうですか、残念です。ではどうやって瑚太朗の暴走を抑えますか？」

「こうするんだよ……。瑚太朗君、はい電話帳。怒りはここにぶつけちゃえ」

「ガルルル……。ム……。ムガ……。ムグオアアアッ！」

電話帳引き裂いちゃったけど、これ怪力という話で済むのかな？

瑚太朗はもうちょっと気をつけないと能力の事一般人にばれちゃうんじゃない……

「ソシテチヨット……。ツカレタ……」

「落ち着いた？」

「……。うん……。少し。頭がぼんやりするな」

「……。驚きものの怪力ね」

引き裂かれた電話帳を見て、朱音は引き気味のようだ。

「さて、瑚太朗も落ち着いたようですし、私はそろそろ帰りますね」

「あれ？ 簗ちゃん今日は一緒に帰らないの？」

「ええ。小鳥もたまには瑚太朗と帰ったらどうですか？」

「そうだねえ。まだちょっと暴走が心配だしそうするね」

「では皆さんお疲れ様でした。」

「また週明けに会いましょう」

「おつかれさま簗ちゃん」

「おー、おつかれー。じゃあまたな」

「ええ……。ご苦勞様」

…さて、ようやくオカ研に入部したけど明日から休日か…
明日明後日は何して過ごそうかな

10月09日(土)

ラスボスさんとの遭遇(後書き)

日付で分かりますと思いますが、ラスボスさんの正体は朱音さんでした。色々な原因があるとはいえ、

ちよくちよく世界を滅ぼそうとしていますし、

世界を滅ぼすといったらやっぱりラスボスでしょう。

ちなみに今回ラスボスねたを何か入れる予定でしたが、思っていたよりも話が長くなったので断念しました。

ラスボスねたに関しては機会があれば入れてみます。

10月10日(日) 見たか? 気づいたか? 私が悪霊だ(前書き)

セリフの前に人物名があると見にくい、という意見が
ちよくちよく出ていましたので、

今後も前回までのような形で書こうと思います。

人物名があった方が分かりやすいという方は、

ブログの方は人物名ありにしていますので、

そちらでご覧になると見やすいと思います。

10月10日(日) 見たか？ 気づいたか？ 私が悪霊だ

「あれ？ 小鳥、今日はお出かけですか？」

いつもより遅めの朝ごはんを食べていたら、
小鳥が余所行きの服でリビングに入ってきた。

「うん。瑚太朗君の家にこの前注文したハーブが届いてるみたいだから、

ちよつと瑚太朗君家のベランダをガーデニングしてくるよ！」

小鳥が満面の笑みで答えてくる。

でも明後日からテストなのにその余裕はいかなものだろうか。
よし、ここは少し釘を刺しておくかな。

「確か明後日からはテストだと聞いた気がしたのですが……」

テストの話題が出た瞬間、小鳥の笑顔が凍りついた。

「そうだったよ！」

「本気で忘れてたんですか……」

「どうしよう。どうしよう」

「まあ学校のテストなんて一夜漬けで大丈夫でしょう。」

それに赤点さえ取らなければどうとでもなると思いますし」

「そうだよね」

再び満面の笑みで答える小鳥。

でも普段勉強しない人は何だかんだで一夜漬けも失敗する気が…

小鳥の事とはいえ所詮テストだしそこまで気にとめなくてもいいかな。

さすがに留年するほど成績が危ない、ということはないと思うし。

「じゃあ気を取り直して瑚太郎君家にしゅっぱーつ」

「ふむ、瑚太郎の家ですか……」

「どうしたの篝ちゃん？」

「小鳥、今日は特にやることもありませんし、私も付いていっていいですか？」

このまま家に居ても暇なので、駄目もとで頼んでみる。

「うん？ 篝ちゃんが瑚太郎君家に？」

「はい」

「うーん」

小鳥が唸りだした。ちょっと悩んでいるようだ。

「そうだね。テストが終わるまではあんまり相手できなさそうだし、一緒に行こうか」

「ありがとうございます小鳥。」

では改めて出発しましょう」

「そだね」

そんなやり取りをした後、すぐに家を出てあつという間に、とはいかないけど、数分くらいで天王寺家の玄関にたどり着いた。

「さて、どうやら鍵がかかっているようだし、瑚太郎君を呼び出さないかね」

小鳥はそう言うのと玄関のチャイムを鳴らした。

それから少し待っていると、鍵が開く音がしてドアが開いた。

「おじゃまします」

「うん、あがつて」

小鳥は何度も来ているからか、慣れた動作で家に入っっていた。よし、私も小鳥を見習って自然な動作で家に侵入しよう。

「ではお邪魔しますね」

「……………」

「どしたの瑚太郎君？ 急に黙りこんじゃって」

「さあ？ 何か悪い物でも食べたんじゃないですか？」

「なあ小鳥。俺は今幻覚を見ているのかな？」

「ここに居るはずのない人物が見えるんだが」

「え？ もしかしてついに昼間から幽霊が現れちゃったの!？」

「そつえば最近幽霊に襲われているんでしたね。」

「で、幽霊はどの辺に見えますか？」

「お前だよ!!」

瑚太郎はそう言って私を指差してきた。

「え？ 私が幽霊？ 冗談は顔だけにしておいて下さい」

まあそういう意味ではないだろうけど、一応否定しておく。本当はそれが正解も正解。大正解なんだけどね。

「違っつて。何で簞がここに居るのかってことを問題にしてるんだよっ!」

「後半の台詞には突っ込まないんだね…」

瑚太郎はスルーしたけど、小鳥が呆れ顔で突っ込んできた。

「何故かと聞かれたなら……まあ暇だからです。

そんな時に小鳥が瑚太郎の家に出かけようとしていたので、おまけで付いてきました」

「おまけって…」

「まあまあ瑚太郎君、篝ちゃんも才力研を手伝うことになったんだし、

親睦を深めるためにも一緒に遊ぶというのはいいと思うよ」

「それはそうなんだけど…」

瑚太郎め…中々渋っているな。

まあ今の時点では恐らく小鳥に惚れて
いるんだろっし、この反応は当然かな。

……しょうがない。こういう時のための切り札を使うか。
まずは会話を誘導っと。

「ところでご両親の姿が見えないようですが…」

「え？ ああ、うちの両親は今出張中だから、疑似一人暮らし状態
だな」

「両親のいない家に女の子を連れ込むと…」

自作の瑚太郎観察ノートに罪状を書き記す。

「あの一篝さん」

「何ですか？」

「それは一体何を書かれているのでしょうか？」

「ああ、これですか。これは瑚太郎観察ノートです。」

このノートには瑚太郎のふしだらな行動を記録しています」
「ふつ、俺はふしだらな行動なんて…」

瑚太郎は余裕の表情をしているけど、
残念な事にネタはかなりあるんだよね。

「10月6日、静流に体重、スリーサイズを問いただす」
「10月7日、ルチアの食べかけのパフェを舐める」
「10月8日、ルチアが返却したカレーのルーを舐める」
「10月9日、ルチアの弁当の匂いを嗅ごうとする」
「同日、朱音に胸をさわらせてくれるよう頼み込む」

今までの瑚太郎観察と小鳥からの聞き込みで得た情報のうち、
言い逃れが出来そうにないものを選んで列挙する。

「で、何か言いましたか？」
「生まれてきてごめんなさい……」

今までのセクハラ的行動を並べ立てられた結果、瑚太郎の
テンションは最低まで下がってしまったようだ。
よし、計画通り。後はこのまま押し切ろう。

「それで、私がここに居ることに何か問題がありますか？」
「すみません俺が悪かったです。どうぞお上がりください箆様」
「そうそう。最初からそうやって素直に上げておけばいいのです」

ようやく家に上がる許可が出たようだ。

「まあ箆が家に遊びに来ることなんて、
奴の来襲に比べたら全然問題ないよな…」

瑚太郎が暗い顔で何かぶつぶつ言ってる。

「どうしたの、暗い顔して」

「今朝方、けいたろうが逝去した」

「誰？」

「気の良い式神さ……」

「？　もしかして、疲れてる？」

「瑚太郎。あなた疲れてるのよ……」

某有名海外ドラマの台詞をばくってみる。

「夜が怖い……」

「どうしたもんやら」

「せっかく瑚太郎が好きそうなネタを振ったのにスルーされてしまいました」

ちよつとシヨック。

「ああ、すまん簞。でもこの幽霊騒動はマジで洒落にならんのだ」「そういう事なら仕方ないですね」

「まあ昼間はいいんだ。おてんと様は素晴らしい。」

「昼間にはなんかこう、闇を退ける良き力があるように思えるよ」

「だから昼なんだよ」

「まあ小鳥たちは気にしないでいい。ひとまずコーヒーでもしばいっせ」

「あ、先にこっち、やつちやいたい」

小鳥は玄関に置いたままになってる大量の荷物を指さした。

「今週の緑化グッズだな。」

「じゃ二階に運ぶわ」

「お願いする」

瑚太郎が荷物の一部を部屋まで運んだ。

「私も手伝いましょうか？」

何もしないというのも悪い気がしたので、瑚太郎にそう提案してみる。

「いいっていいって。こういう力仕事は男に任せとけ」

でもやっぱり瑚太郎は女子に重い物を持たせたくないようだ。

「まあそういう事なら仕方ないですね。では荷物運び頑張ってください」

「おう。ちゃっちゃと運ぶぜ。」

それにしてもまた今日もどっさりだな」

「またたくさん買っちゃったよ」

「いいって。どうせ俺の元には落ちてこない金なんだし。それじゃ残りも持ってくる。二階で待っていてくれ」

「体育座りで待ってる」

「私はエロ本でも探しながら待ってますね」

まあ実際に探すつもりはないけど。

「ちょっと、篝さん？」

あなたは一体何を仰っているのでしょうか？」

「ふむ、冗談で言っただけですが、その態度からすると

家のどこかにはエロ本が隠されているようですね。

まあ私も鬼ではありませんし、実際に探すのは止めてあげましょう」

「やっぱり瑚太郎君も男の子なんだね……」

小鳥が遠い目をしている。

さすがに瑚太郎の好感度を下げ過ぎたかな？

ちよつとフォローを入れておこう。

「小鳥。男子高校生にもなると逆にエロ本

などに興味が無い方が少数派だと思いますよ」

とりあえず一般論を述べてみる。

「そうなんだ……」

「そういう訳なので瑚太郎をあまり変な目で見ないであげてくださいね」

「篝……」

瑚太郎が私を救世主でも見るような目で見つめている。

まさか私が瑚太郎の肩を持つとは思っていなかったのだろう。

「つてちよつと感謝しかけたけど、よく考えたらお前が元凶だろ！」

ばれたか。

「まあまあ。元々の原因は瑚太郎がエロ本を持っていた

ということになるんですし、この話はこの辺で打ち切った方が瑚太郎のためにはいいと思いますか？」

「確かにそれもそうだな……」

「はいはい、じゃあこの話は終わりということじゃつちやと荷物を運んで下さい」

キリキリ運んできた。

やはり力はけっこう強いみたいだ。

「…そのぼつちやり系の人？」

小鳥が廊下から室内を観察しているのを不審に思ったのか、瑚太郎が軽い感じで声をかけてきた。

「小鳥、呼ばれてますよ？」

この場には一応二人いるけど、ぼつちやり系の称号は欲しくないし、即座に小鳥に称号を譲渡した。

「言ったのは俺だけど、何気に簞もひどいな…」

「ぽぽぽぼつちやり系ちゃうわつ。あと三年くらいかけてスーパーモデル並みにスリムになるし」

「有酸素運動3000時間くらいしないとな」

「芸能界デビューするよ」

「芸名は」

「骨川スリム」

「…色モノアイドルみたいだ。

で、俺の部屋がどうしたって？

また男臭いとか騒ぎながら窓全開で換気しようってつもりなら、俺はいつでも傷つく準備はできてるからな」

「よし小鳥、早速換気を始めましょう」

瑚太郎を落ち込ませてみたいので、小鳥にそう提案した。

「ちがう。なんかね…」

小鳥はこちらをちらちら見ながら何か悩んでいるようだ。

「…波動を、感じた」

奇妙な手振りとともにそう言う、

「波動というアレか。ウェーブ的な何かか」

「そうだ。それはまたバイブレーション的な何かでもある」

「波であり、振動でもあるのか」

「両方の性質を持つているかもだ」

「一体何なんですかこの会話は…」

妙な流れになっていたので、とりあえず突っ込んでみた。

「ひとことで言うと、妙な気配がしたなーってことだ」

「なんだ、ついに感じてくれたか。そいつが霊の波動だ」

「これがそうだと申すか…」

「俺の部屋は今最高にヤバいんだ。」

「式神の加護もないし」

「部屋入ろうとして、ぴくってしてしまつたよ。」

「これ、なんとかなるの？」

「会長がなんとかしてくれるって話なんだよ。」

でも朝からメールしてんだけどレス来ないんだよな。

昨夜で体験版終了のお知らせ状態でさ…」

「効果あつたんだ、会長のマジカル」

「あつたあつた、すげーと思いました。」

でも、いろんな偶然の結果に過ぎなかったんだ、それ」

「次の対策をおねだりしなきゃ…今日中に」
「その必要はありません。」

謎は全て解きました」

「…さ、ガーデニングやろうぜ」

「ちよつと、無視しないで下さい」

「だってなあ…」

「ちなみに聞いておくと、原因は分かったのか？」

「いいえ、さっぱりです」

「やっぱり無視して正解じゃないか…」

「まあその話はもういいとしてガーデニングを始めましょうか」

瑚太郎が自分から言ってきたくせに、と言いたげな表情をしているがそこはスルー。

「そうだな。楽しい気分で満ち満ちていれば、霊も逃げるかもしれん」

「うん、おっけー。」

それにしても瑚太郎君ちのベランダ久しぶり」

「三週間ぶりくらいだな」

「お代金もらってるから頑張らないと。」

この三週間、あたしが言った通りに世話しといてくれた？」

「ああ、もちろんだ。」

たっぷり世話しといたぜ」

「そ、よかった。じゃ今日は楽そうだね」

私たちがベランダに躍り出ると、

何とそこには荒れ果てた小鳥のガーデンが！

「枯れてるーっ！？ あたくし様

のささやかな緑化運動が！ 茶っこい！」

「小鳥さんをこんなに動揺させるだなんて許せねえな…。相手すんぞコラァ！出てこいやぁ！」
「あんた（あなた）です」

思わず小鳥と一緒に突っ込んでしまった。

「…ごめんなさい」

「全滅やんけ」

「申し訳ございません。」

聞いてくれ。

たっぷりたっぷり世話したんだ…。

せっかくおまえがクリエイトしてくれたガーデンだ…絶やしちゃうまいと思って」

「根絶やしになつてゐる。」

「暴君か独裁者ばりの手際で、完璧に」

「さすがは瑚太郎です」

パソコンとネット環境はあるんだし、ハーブの育て方くらい調べようよ…

「愛情たっぷり水たっぷり栄養剤たっぷり…」

「…そちは今、栄養剤と申したか？」

そういうのは難しいから、置いていかなかったんだけど？」

「歩いていたら園芸の店があつたので。」

「栄養剤が特売されていたから、

大量購入して、栄養祭り」

「こらーっ！っ！」

「栄養の与えすぎが原因です」

「お、思いもよらなかった…」

「栄養も愛情も、与えすぎはだめ」

「愛情も？」

「そ」

「愛情はいいと思うんだけどな」

「今はドライでクールなのが流行りなの」

「…そんなもんかねえ」

そんなこんなで、ガーデンを総入れ替えすることになってしまった。

「悪い、すごい手間かけちゃって」

「仕方ないよ。」

大量に買い込んで正解だった」

「瑚太郎君は手伝わないでいいから、下行ってコーヒー淹れといて」

瑚太郎は早速戦力外通告されていた。

「うん。じゃ、めっちゃ美味しいの淹れるわ」

「さて、大仕事だねこりゃ」

瑚太郎がコーヒーを淹れに下に降りたので、
小声で小鳥に話しかけた。

「さて、部屋に入る前に小鳥は気づいていたようですが…」

「うん」

「最近の幽霊騒動の犯人は私です」

「やっぱりそうなんだ」

「まあ理由についてはいつも通り、予知で見た未来に近づけるため
ですね」

「そっかあ。まあ詳しい理由は聞かないでおくよ」

「そうしてくれると助かります」

「おい、コーヒー入ったけど？」

「もうっ」

「どうやら瑚太郎が戻ってくるみたいですし、この話はここまでにしましう」

「そだね」

しばらくすると、お盆にコーヒーとクッキーをのせた瑚太郎が部屋に入ってきた。

「どんなもん？」

「まだ序の口」

今はまだ枯れた植物の処理中だ。

「土も取っ替えないとアカンの。

土は自分でブレンドしなきゃ」

「本格的だな…」。

さすが天王寺家のガーデナーであらせられる神戸さんや」

「ふへへえ」

瑚太郎に褒められて小鳥はにやにやしている。

どうやらまんざらでもないようだ。

「休憩しよつと」

「では私もご相伴に預かりましよう」

小鳥と一緒に室内に戻り、コーヒーに口をつける。

「しかし全滅してたとはな…気付かなかった」

「どうりでハーブ効果がないはずだ」

「精神安定に効果あるんだっけ」

「うん、そう。」

お脳によく効くチヨメチヨメ成分がね？」

「あんま詳しく聞かない方がいい気がするな、その話題……」

「このクッキー、おいしいねえ」

「近所のパン屋で売ってた。いつこ15キロカロリーだって」

「素敵だよ」

「薄味だから、ブルーベリージャムをつけて食べるとうまい」

「しあわせだよ」

「小鳥、そんなにジャムをつけたら太りますよ」

「……ところで気になってたんだけど」

どうやら都合の悪いことは聞かなかったことにしたようだ。

「うん？」

「この紙切れなに？」

小鳥は机に置きっぱなしになっていた、紙くず（式神）をつまみあげた。

「そいつ、けいたろう。」

俺思いのいいやつだった……く。

いのちひとつで一夜ずつ、俺を守ってくれた……」

「……なんだろう、全然わからない話になってる……」

「小鳥、そつとしておいてあげましょう」

さすがに式神は喋れないと思うし、きつと夢でも見たんだろう。

「三晩の撃退でもう諦めてくれたことを期待したいよ、霊には」
「そんな瑚太郎にここでプレゼントのお知らせです」

もう襲撃しなくても問題ないだろうし、ここらが潮時かな。
という訳で、バッグの中に入れてきた小鳥の
家のハーブを取り出して瑚太郎に手渡す。

「えーと？ 何これ？」

瑚太郎はこれが何なのか分からないようだ。
まあ普通のハーブだしね。

「聞いて驚きなさい…。何とそれは除霊ハーブです」

「な、何だってー！！」

驚いてる驚いてる。

「この前街を散策中に偶然露店で見つけたので、確保してみました。
その式神とやらが役に立ったのなら、もしかするとそのハーブも
未知なる力を秘めているかもしれませんよ」

「なるほど…確かに一理あるよ」

「まあ万が一程度の可能性だとは思いますがね」

本当はただのハーブだから億に一つも可能性はないんだけどね。

「それでも助かるよ。ありがとう篝」

「…何か瑚太郎がえらく素直ですね」

「それだけ霊の襲撃に参ってるってことなんじゃない？」

「まあ何はともあれ、喜んでもらえたなら良しとしましょう。

では、プレゼントも渡しましたし、私はそろそろ帰りますね」

「えゝもう帰っちゃうの？」

「ええ、もうすぐテストですし。という訳で小鳥もあまり長居しないように」

出かける前に釘を刺したから大丈夫
だとは思っけど、一応もう一度言っておく。

「だ、大丈夫だよ」

目が泳いでいた…。

しょうがない、瑚太郎にも頼んでおくか。

「瑚太郎も小鳥があまりにも長居するようだったら追い出して下さいね」

「任せとけ。俺のせいで小鳥が留年とかになったら嫌だしな」
「では二人ともさようならです。また学校で会いましょう」

小鳥とは家で会うんだけど、同居してるのがばれると
色々と面倒な事になりそうだし、一応秘密にしている。

「うん、じゃあまたね」

「ああ、じゃあまた学校でな」

二人に見送られながら、瑚太郎宅を後にした。
さて、この後は何をして暇をつぶそうかな

……ちなみにこの日小鳥は夕方まで帰ってきませんでした。

10月11日(月)

天と吉野の神隠し(前書き)

今回は簀の単独行動での追跡のため、最初の方の小鳥とのやり取り以外はほとんど原作と同じです。後はオリジナル要素が少ないので、いつもに比べて短めです。

10月11日(月)

天と吉野の神隠し

「瑚太郎の霊圧が消えた……!?!」

遅めの朝ごはんを小鳥と一緒に食べていた時、急に瑚太郎の位置情報が掴めなくなった。

「どしたの急に？」

小鳥が呑気に訪ねてきた。小鳥は某死神漫画を読んでいないのだろうか？

……まああれは週刊少年だし、読んでないのかもしれないか。

「全く小鳥は呑気ですね。瑚太郎の霊圧が消えたというのに」

「いや、いきなり霊圧とか言われても……」

「まあ簡潔に言うと、瑚太郎の体内にある私の一部を感知することで瑚太郎の大まかな位置情報などは常に把握しているのですが……」

前は出来なかったけど、瑚太郎の観察とかをしていたら最近は何となく分かるようになってきた。

「ですが？」

「その位置情報が分からなくなりました」

「それって大変な事なの？」

「ええ。最後の位置情報は学校でしたし、多分ガイアの魔物が生息している空間に迷い込んでしまったみたいですね」
「それは一大事だよ!?!」

小鳥にもようやく深刻さが伝わったようだ。

深刻さが伝わってなかったのは最初にネタ振りをしたせいかもしれないけど…

「ようやく事の重大性が分かりましたか。

そういう訳ですので、私は瑚太郎の所に行ってきます」

「うん、早く行ってあげて！」

小鳥の切羽詰まった様子の言葉を背に、学校へと向かう。確か吉野と一緒に裏学校を探検してただけだったはずだし、大丈夫だとは思うけど、一応急いで行くでしょう。

「うお、悪いっ。

考えごとしてた。なんだ？ どんな恋の相談だ？」

「恋の相談じゃねえよ…。

ここはどこだ？」

という訳で無事学校に到着。
見つかるかと面倒なので当然不可視状態です。

「学校だろ？」

「だから、学校のどこだ」

「どこって…」

「迷っちゃったようだな」

「広いからな、ここ。」

適当に階段降りてけば、わかる場所に出るだろ」

「さっきから探しちゃいるが、階段をとんと見ねえ。
で、今さっきあんなものを見つけた」

吉野が廊下の行き当たりにある6階という表示を指さす。

「オレたちはいつ四階から六階に移動したんだ？」

「話し込んでいる間に無意識に階段を昇った…っけ？」

「いや、記憶にやねえぞ。」

ちっ、こんがらがってきやがった。

天王寺、今度はそっちが先に行け。出口まではどんな

くだらねえ話にも付き合ってやるから、とっとオレを帰らせろ」

「おお、こんな時こそマッピーの出番だろ。」

新宿駅だろうがウメチカだろうが…完全攻略してやんよ」

瑚太郎は例の地図ソフト、マッピーを起動しているようだ。

「あれ？」

「どうした」

「なんか携帯自体が受信できてねーな」

…オレのもだ。

校内で使えないなんて、はじめてだな」

「まあマッピーは、室内はマッピングしてくれるだけだから関係ねーけど」

そう言っていると瑚太郎は早足で廊下を進んでいった。

「おい…」

「ああ、どうした…」

「いつまで歩かせやがる…」

さすがに少し歩き疲れたのか、吉野が文句を言っている。

「もうちょっとだバディ（相棒）」

「ノーバディだ」

「意味違うだろ」

「要はテメエも迷ってるってことだな？」

「いや、いくら歩いても目的地につかないだけだ」

普通それを迷っているという。

「迷ってるじゃねえか」

「なんなんだよ、この校舎は？」

「知らねえ。こっちが訊きたいもんだ。」

でかい建物だってことはわかつちやいたが、これほどだったか？

どう考えても明らかに異常だと思う。

「汗ばむほどに歩かされてるな。」

小鳥のやつだったら、汗ばむわあ、ってネタ振りしてくるところだ」

「そういうことを言いそうな女芸人ならオレも知っているがな…」

…そうか、あいつはそういうことを言うタイプか」

「なんだよ」

「なんでもねえさ。」

それより迷路だ。階段もないと来た。こいつはおかしいぞ」

「延々と廊下が続いているよな…」

つうか、これってあれか…」

そつえば瑚太郎は以前も圧縮空間に迷い込んでたね。

「マップ」も延々と一本道を出力してるな。

トンネルか渡り廊下でもなければこんな細長いマップにならんぞ。明らかにおかしいわけだ」

「教室に入ってみるか」
「そうだな…」

瑚太郎たちは教室に入っていたけど、
面倒だしここで待ってるでしょう。
これだけ近くにいれば何か起きても大丈夫だろうし。
さて、暇つぶし用に持ってきた本でも読むかな。

く 読書中

がらがらっ！

お、ようやく教室から出てきたみたいだ。
どうやら今度は来た道を引き返すみたいだ。

無言で歩き続けること15分程。
ようやく瑚太郎が口を開いた。

「吉野、携帯の電話、見てみれ」

「こいつは…電波が途絶してるようだな」

「途絶してるのは俺たちの方かもな」

「どういう意味だ」

「よく言うだろ、神隠しって。」

ある日忽然と消えてしまって、二度と戻らない…みたいな」

「ざけんな」

「だったら良かったんだけどな…」

また無言で歩き出したよ……

しょうがない、ただ付いていくだけというのも暇だし、
本でも読みながら付いていくかな。

「…おかしい」

「だな。来た以上に戻ってる」

瑚太郎は再びマッピーを起動しだしたようだ。

「マジかよ！」

「どういうことだ…」

「さっきから見てるそいつは、いったい何だ？」

「ああ、マッピーってウォーキングナビゲーションソフトだ。
歩いた場所を記録してくれる」

「ところがね、マッピー君はさっきまで歩いてきた
地形が変わっちゃいましたってエラーを吐いてる。

現実の地形が瞬時かつ物理的に書き換わった、とでも言おうか」

「…奇っ怪な話になってきやがったな」

「文明の利器も役立たずとはな」

「歩くしかねえか…」

「それが俺たちのマイウェイだな」

「…どつちかといやあスピリットアウェイだろうよ」

「意味は」

「テーマで調べろ」

「あれま」

再び歩き出した。

1〜2時間くらいは経っただろうか？

別に疲れたりはしないけど、とにかく暇だ。

本を読みながら歩くのはやっぱり危なかったし…

お、また立ち止まったみたいだ。

さて、また歩き出す前にまた本でも読んでよう。

くまたまた読書中

「だらっ、がっ、げほっ」

「ふーっ、ふーっ、ふーっ」

お、これはそろそろオカ研の部屋に突っ込むところかな？

「どっしやああああっ」

「…ぶっ！？」

朱音が机の上でアイスを食べる。

いずれ話し合い（脅迫）に使えるかもしれないし、
持ってきてたデジカメで撮っておくかな。

【瑚太朗】

「あ？」

あまりにもおかしな光景に瑚太朗はフリーズしてしまったみたいだ。

【瑚太朗】

「なんすかああああっ、あんたあああああっ」

さて、無事に圧縮空間からは抜けれた
みたいだしもう帰っても大丈夫だろう。
後は家に帰って小鳥に瑚太朗の無事を
報告すれば今日のミッションは終了だ。

……今日は何か精神的に疲れたし、報告が終わったらすぐに寝るとしよう。

10月11日(月)

天と吉野の神隠し(後書き)

次からはテストなのであまり書くこともありませんし、
一気に数話更新するかもしれません。

10月12日(火) カンニングは犯罪です(前書き)

今回はかなり短くなりました。

原作でもさつと通り過ぎてますし、

テスト中という事で絡めるキャラがあまりいないので…。

10月12日(火)

カンニングは犯罪です

「おはようございます小鳥」

「おはよう…篝ちゃん……」

朝食後にリビングでくつろいでいたら、

眼の下にくまを作った小鳥がやってきた。

「随分と眠そうですね」

「うん……。昨日ちよっと遅くまでテスト勉強してたからね……」

「とりあえず顔でも洗ってきたらどうですか？」

「うん。そうするよ……」

今日はまた一段と小鳥のテンションが低いみたいだ。
いつもは寝起きでも割とテンションは高めなのに……。

「それで、朝ごはんはどうしますか？」

「ちよつと食欲ないかも……」

「そうは言ってもきちん朝食を取っておかないと

テスト中に頭が働かないかもしれませんし、

とりあえずこれでも食べておきなさい」

小鳥に向かってカロリーメイト(チョコ)を放り投げた。

「ありがと篝ちゃん」

カロリーメイトが小鳥の口の中に消えていく。

まあ一箱食べたなら栄養的には多分問題ないだろう。

「さて、では栄養の補充も終わったようですし学校に行きますか」

「あれ？今日はテストなのに篝ちゃんも学校に行くの？」

「ええ。家に居ても暇ですからね」

「学校に来ても特にやることはないと思うんだけど…」

「そうですね。確かにテスト中は皆忙しい。これは事実です。

ですが、朱音ならあるいは…」

「あゝ。確かに会長さんならテスト受けてないかもね」

「そういうことです。まあ学校までは大して時間もかかりませんし、部室に居なかつたらまた家まで帰ればいいだけですからね」

「ではそろそろ時間ですし、出発しましょうか」

「そだね」

家の鍵を閉め、学校への道を二人で歩く。

制服姿なので、普通に話しながら行けるからわりと気楽な感じた。制服がくるまではわざわざ不可視状態にならないといけなかったし…。

「そつえば小鳥、テストの必勝法を
思いついたのですが聞きたいですか？」

多分小鳥は採用しないと思うけど、昨日の夜ある方法を思いついたので、話を振ってみる。

「え！？そんなのがあるの？」

それは小鳥さんが今一番欲しい情報だよ！」

物凄い食いつきっぷりだ。

「物凄い食いついてきましたね…」。

まあいいでしょう、そこまで言うなら教えてあげましょう」

「ありがとう篝ちゃん！」

「テストの必勝法とは……」

「必勝法とは？」

「私が一緒に付いていつて他の人の答案を観察し、それを小鳥に教えることです。これで満点は無理でもかなりの高得点が期待できます」

これこそ、私と小鳥だからこそ使える究極のテクニック！

「それは必勝法じゃなくてカンニングだよ……！」

「大丈夫ですよ小鳥。絶対にばれませんから」

「ばれるばれないの問題じゃないの……！」

「そうですね……。いい手だと思ったのですが」

「とにかくカンニングは駄目だから、

今言った方法は絶対に使わないでよ……」

「それは使えという振り……」

「じゃないからね」

以前も同じネタをやったからか、言う前に潰されてしまった……。しかも満面の笑顔で……。

「中々突っ込みが鋭くなってきましたね」

「そりゃ篝ちゃんがよくボケてくるからね」

「さて、もう少し話を続けていたところですがもう校門も見えてきましたし、私はそろそろ部室の方に行きますね」

「いつてら」

「ええ、ではまた後で会いましょう」

「うん、またね」

校門で小鳥と別れ、5階にある部室へと行ってみたが、さすがに朱音はいなかった。

……今日はもう帰るとしよう。

本当、遊ぶ相手もないし早くテスト終わらないかな。

10月12日(火) カンニングは犯罪です(後書き)

次回も多分短くなると思います。

10月13日(水)

ラスボスさんとの交渉(前書き)

今回は珍しく完全にオリジナルで構成されています。
後、最初は短くする予定だったのですが、朱音との
会話を書いているうちにいつの間にかかなりの長さに…

10月13日(水)

ラスボスさんとの交渉

「おはようございます小鳥」

「おはよう……。篝ちゃん………」

いつも通り朝食後にリビングでくつろいでいたら、
ゾンビのような足取りで小鳥がやって来た。

「今日もまた随分と眠そうですね」

「うん……。今日は苦手な教科があるし、

昨日よりかなり遅くまで勉強してたから……」

「とりあえず顔でも洗ってきなさい」

「うん。そうする……」

今日はさらに小鳥のテンションが低いみたいだ。

さすがに二日続けて勉強漬けで気が滅入ってるのかな？

「それで、朝ごはんはどうしますか？」

「今日もちよつと食欲ないし、カロリーメイトでも頂戴」

「そう言うと思って既に用意しておきました」

小鳥に向かってカロリーメイト(チーズ)を放り投げた。

「ありがと、篝ちゃん」

これで二日連続で朝食はカロリーメイトか…

まあ朝食だけだし、多分問題ないだろう。

「さて、では今日も元気に学校へ行きますか」

「私はテストがあるからそんなに元気になれないよ…。」

テストを受けなくていい簞ちゃんが羨ましい…」

「まあ学生の本分は勉強ですからね。」

それに今回はきついかもかもしれませんが、もう森に行く必要もありませんし、今後はそこまできつくもないと思いますよ」

今後は学校を休まないで済むと思うし、

ここまで苦労するのは今回が最後だろう。

「それはそうなんだけど…」

小鳥は一応納得したようだけど、まだどこか不服そうだ。

「まあまあ、ここで嘆いていても何も始まりませんし、
とりあえず学校に行きましょう」

「そだね…」

小鳥もさすがにこれ以上愚痴を言うのは止めたようだ。

家の鍵を閉め、学校への道を二人で歩く。

小鳥は教科書を読みながら歩いているし、
今日は本当に危険な教科書があるようだ。

「小鳥、前を見て歩かないと危ないですよ」

私が前を見ているから多分大丈夫だとは思っけど、
念の為に小鳥にも教科書を見ないで歩くよう注意する。

「ごめんね。今日はちょっと本気で危ないから、

前方確認は篝ちゃんにお願いするよ」

「まあそういうことなら私は構いませんが…」

「ありがと、篝ちゃん」

小鳥はそう言うのと再び教科書を読み始めた。

小鳥は教科書を読むのに集中しているので、特に会話も無く学校への道を歩いていく。

しばらくすると校門が見えてきたので、小鳥に話しかけた。

「さて、もう校門も見えてきましたし、私はそろそろ部室の方に行きますので、小鳥も一旦教科書から目を離して下さい」

「え？ もう着いたの？ 集中してたから全然分からなかったよ」
「着いたのに気付いてなかったんですか…」

よっぽど集中してたみたいだ。

「では私は部室の方に行きますので。」

「うん、またね」

「ええ、ではまた後で会いましょう」

今日も校門で小鳥と別れ、5階にある部室へと行ってみる。

昨日も居なかったみたいだし、今日も居ないかもしれないな。そう思いドアノブに手をかけてみると、普通にドアが開いた。どうやら鍵がかかっていなかったようだ。

「ようこそジプシー。我が神秘の部屋に」

真っ暗な部室の中には、

黒いローブを羽織った朱音が、座っていた。

「朱音、それは魔女のコスプレか何かですか？
それにしても朱音がコスプレ好きだったとは意外ですね」

とりあえず先制攻撃を仕掛けてみた。

「コスプレじゃないわよ……」。

これはキャラ作りの一環で……」

「そういうものをコスプレって言うと思うのですが……」

「……ぐぬう！」

はい、1ぐぬう頂きました。

「それはまあいいとして……」

「逃げましたね」

分が悪いと悟ったようだ。

「……それはまあいいとして、本題に入っても構わないかしら？」

「本題？　なるほど、一人でコスプレをして楽しんでいた訳ではなく私を待っていたということですか。私が来るかどうかも分からないのに何故そんな面倒な事をしたのかは知りませんが、何か話があるなら聞くのは構いませんよ。暇だったので部屋に顔を出したからですから」

まあ恐らく私の身元調査をしたものの、情報が全く手に入らなかったから直接私に尋ねてみよう、と言ったところだろう。

「そう？　それじゃ聞くけど、あなたは一体何者なの？」

やっぱりそうか。さて、ここは事前小鳥と打ち合わせしておいた通り答えるとするか。でもその前にとりあえず一旦とぼけてみよう。

「何者、とはどういう意味ですか？」

「私が調べたところによると、篝という人物はこの風祭市内に存在しないわ」

さすがにガイアのお膝元だし、その程度は楽に調べられるか…。

「さすがは聖女のしもべと言ったところですか」

「！？ その名を知っているという事は少なくとも一般人ではないよね」

「そうですね、まあ簡単に言つと私は野良の超人です」

「野良の超人ですって！？」

まあこう言っておけば、ガーディアンとガイアは敵対関係だし、諜報能力は

ガーディアンの方が圧倒的に高いという話だったはずだから、私の身元調査

は断念せざるをえないだろう。

「ええ、つい最近まではガーディアンに所属していたんですが、厄介な任務を強制で任されそうでしたので、ちよつと逃亡してきました」

「ちよつと逃亡って…」

「そんなに軽く抜けれるものなの？」

よし、話に食いついてきたようだ。

「いえ、最初の頃は追手も来ていましたよ？ まあ最近は見かけませんけどね。多分諦めたんだと思います。私は基本的に自衛しかしてないですし、今の忙しい時期に、敵対行動を取ってこないものに人員を割く余裕もないのでしょうか」

全部嘘だけだね。

「なるほど…。確かに今の話が本当なら、今の時期にわざわざ戦力を減らすような真似をガーディアンの中がするとも思えないわね。…ちなみに逃げ出すきっかけになった任務ってどんなものだったの？」

任務についての質問が来たか…。まあとりあえず達成が難しそうなやつを言っておけばいいだろう。

「クリボイログ、キリマンジャロ、フォゴ、地竜の撃破ですね」

とりあえず覚えている中で強い魔物を言ってみた。

「それはまた無理難題を押し付けられたものね…」

「まあ前3体については特に問題は無いと思いますけど、地竜についてはちよつと実力も分かりませんし。

私は勝てる戦いじゃない主義ですし、何より死にたくはありませんからね」

実際は地竜にも普通に勝てると思うけどね。

「これで私が何者か、という事に関する質問は終わりですか？」

「ええ、結構よ。本当かどうかの確認はできないけれど、少なくとも矛盾は見当たらなかったわ」

「まあ本当のことですし。」

それで、本題はこれで終了ということでもいいんですか？」

これで終了だったら楽なんだけど、さすがにそこまで甘くはないだろう。

「いえ、ちょっと待って。後いくつか聞きたいことがあるわ」

「ふう、しょうがないですね。では手短にお願いします」

「分かったわ。ではまず一つ目。あなたの目的は何？」

「目的ですか？」

「そうよ。あなたがガーディアンを抜けたというのなら、

何故このオカルト研究会に入会したの？」

「それは朱音に最初会った時言ったように、面白そうだったからです。」

幼い頃から訓練などで忙しかったので、まともに学校には通っていないですし、せっかくガーディアンを抜けたなら青春を謳歌してみるのがいいかなーと思ひまして」

「なるほど…。では次は神戸小鳥との関係についてよ。」

もしかしてあの子もガーディアンの関係者だったりするの？」

「いえ、小鳥はガーディアンの関係者ではないですね。」

あの子は以前森によく行っていたんですが、ちょうど私が森を抜けていた時に魔物に襲われていましたね。

さすがに放置するのは目覚めが悪いので、魔物を殺して助けたところ、えらく感謝されました。それ以来寝床などを提供してくれている、まあ最初の紹介でも言ったように友達のような関係ですね」

はあ、ねつ造設定を喋るのもいい加減疲れてきた。そろそろ終わってくれないかなー。

「つまり神戸小鳥はガーディアンの関係者ではないけど、ある程度は裏の事情を知っているということね？」

「ええ、そういう事になりますね。ガーディアンとガイア、両組織の理念などは簡単に説明しましたので」

一応この辺りのことも小鳥と打ち合わせしてるけど、帰ったらもう一回は確認しておいた方がいいかな。

二人の話が食い違ってしまったら、せつかくの嘘がばれるかもしれないし。

「では次で最後の質問よ。まあ質問というよりはお願いに近いんだけど……」

「お願いですか？ まあそのお願いを聞くかどうかは内容によりま
すね」

「まあ普通そうなるわよね……。そうね、私からのお願いというのは超人としての証を見せて欲しい、ということなのだけれど」

「超人としての証、つまり能力を見せて欲しいというわけですか？」

「そういうことね。今の時点でもある程度は信用しているのだけれど、

やはり何の証拠もなく、私は超人です、という言葉信じる訳には……」

「そうですね、では取引をしませんか？」

「取引？」

「ええそうです。私が能力を見せる代わりに、ガイアには私のことを内緒にしておいて欲しいのです」

「まあそれくらいなら構わないわよ」

「では取引は成立ということ、私の能力をお見せしましょう」

ふう、ようやくこれで終わりか。

リボンは見せたら鍵だつてばれるかもしれないし、能力は身体能力の強化つてことにしておくかな。身体能力の強化なら多分鍵とはばれないだろうし。

「私の能力は身体能力の強化です。では実演してみせますので、ちよつと硬貨を貸してもらつていいですか？」

「ええ、いいわよ」

朱音はそついうと10円玉を手渡してきた。

「以外とせこいですね…。ここは黙つて500円玉を渡すくらいの器量が欲しかったのですが…」

「そんな事はどうでもいいじゃない…」

「重要なのは能力を確認することなのだし…」

「まあいいです。それでは見ていて下さい」

受けとつた10円玉を指の間で挟んで押しつぶした。

「当然身体能力の強化はこの程度が限界ではありませんが、さすがにどのくらいまで強化できるかは教えられません」

「ええ、能力を教えてくれただけでも充分よ」

「まあ私の力量については、ガーディアン内でも上位に位置する、とだけは言っておきましょう。襲撃をかけるならよく考えた方がいいですよ」

「襲撃をかけたりはしないわ…」。

今は大事な時期なのだし、わざわざ敵を増やすような真似はこちらとしても御免よ。それに私はできるだけ約束を守る主義なの」

よし、何とか戦闘は免れたようだ。

「では私は自衛以外では…いえ、小鳥への攻撃も含めましょう。
私と小鳥に手を出さない限り、私からそちらに手は出しません」

「それで結構よ」

「では、普段の私たちは部活の先輩後輩ということで」

「ええ、何も起こらない限りはね」

ふう、真面目な話ばかりだったし、精神的にかなり疲れた。
今日はもう帰ってさっさと寝よう。

「さて、真面目な話をしたら少し疲れましたが、今日はもう帰りますね」

「ええ…お疲れ様」

「ではまた明日お会いしましょう。
という訳でお疲れ様でした」

……さて、これで朱音については問題なくなっただかな？

10月14日(木)

燃え上がるブログ(前書き)

思ったよりも長くなってしまいましたが、ようやく完成しました。

10月14日(木)

燃え上がるブログ

昨日ねつ造設定を喋りすぎて精神的に疲れたからか、今日起きたのは昼前だった。小鳥はちゃんと学校に行っているみたいだけど、朝は大丈夫だっただろうか？

昨日と一昨日の様子を見る限り、ちょっと不安だ。

不安だが…、まあ寝過ごしてしまったものはしょうがない。今日からオカ研も活動を再開するだろうし、早めに部室に行ってみみんなを待っているでしょう。

と思いつつ、部室に行くと、瑚太朗がパソコンでブログを開いているところだった。どうやら試験は3時間くらいで終わったようだ。

「最後に開いたの、いつだったけ…」

「試験前じゃない？」

「そうだったな。掲示板を利用してみたんだっけ。

なんかドキドキするな。どんなレスがついてるか楽しみだ」

「…カキコミひとつで大騒ぎだったことは記憶しておらぬか？」

「あつたような気もするけど」

「都合の悪いことは忘れているようですね」

私が来たのに誰も気づいてないようなので、さらりと会話に入ってみた。

「だねえ…。いたずら書き込み、どうなったかね
って篝ちゃんいつの間に来てたの!？」

「ついさっきですよ」

「お、久しぶりだな簞」

「ええ、みなさんご無沙汰しています。

まあ朱音には昨日も会いました。

それで、今は一体何の話をしているところですか？」

「ああ、今は先週作ったブログの確認をしているところだ」

「なるほど、それで例の粘着君についての話になっていた訳ですか」

「そんな感じだな。まあいくら粘着君でも何日も引つ張らないだろうし、

小鳥はちよつと心配しすぎなんじゃないのか？」

「でも瑚太郎君、ネットは……」

「平気平気。」

新生才力研はもちろん怪しいネタを扱うけど、活動自体は
実に健全かつ安全なんだぜ？ どこに批判の余地があるのか」

「殺人予告……」

瑚太郎たちには聞こえない音量で、ぼそつとつぶやいてみる。

どうやら朱音には聞こえていたようで、少し笑みがこぼれている。

「それはクールな方針なんだけどもねえ……」

「ワンダー！ すげえトラックバックの数だ！

これがトラックバックの醍醐味ってやつだよ。

ガッツいしまつ！ ガッツいしまつ！」

瑚太郎は右腕を突き上げながら、高速で規律着席を繰り返し始めた。

「どうしましょう朱音。瑚太郎が壊れました」

さすがにあのテンションの瑚太郎とは

絡みたくないの、朱音に話を振ってみた。

「放っておけばいいのではなくて？ どうせすぐに現実を知るのだから」

「それもそうですね。コメントの内容を見たらさすがにテンションは下がるでしょうし」

「それバツクするトラックの空耳…」

小鳥は律義に突っ込んでいる。さすがに何年も一緒にいると瑚太郎の奇行にも慣れてくるのかな？
まあ私は慣れたくはないけど…。

「ヒュウ、見ろよ！ コメントもたくさんついてる！
幸先良しだな」

「…そう、なの？」
「……………」

朱音は不敵な笑みを口元に浮かべていた。

「なんですか？」
「ふ……」

意味深な表情をした後、朱音はすぐに読書に戻った。

「まあ朱音の態度の意味はすぐに分かりますよ」

「簞は何で会長があんな態度を取っているか分かるのか？」

「ええ、きっと瑚太郎もブログを確認してみれば分かると思いますよ」

「知ってはいるけど教えないってことか…。ならしょうがない、
ブログをチェックしてみるか」

「そうそう。何でも人に聞くのはよくないですからね」

私がそう言つと、瑚太郎は早速ブログのチェックを始めた。

「おわーっ。」

冷静だつて言つてたのにな」

どうやら例の殺人予告のコメントを小鳥も読んだようだ。

「ごめん、自宅からログインして…」

「これじゃ導火線の短いひとだよ。」

どうしてこんなことしたの？」

「導火線に火がついた。どうしようもなく体が熱かった。」

体を冷ます何かをしなければ収まりがつかなかった。まさに俺こ

そ炎だった」

「おばか」

「…はい。」

詫びレスでもつけておいた方がいい？」

「うん」

「あの一年坊、今頃ぶるつて震えているだろうっからな」

「ネットでの無知は断罪されるべきものよ」

さすがに突っ込まざるを得なかったのか、朱音が口を挟んでいた。

「…へ？ どういう話？」

「まずは続きを読んでみなさいな」

「はあ…」

瑚太郎は納得のいかない顔をしながらも、とりあえず言われた通り画面をスクロールさせようとしているようだ。

「スクロールバーが全然動かないぞ…」

私より後の書き込みは見えてないし、
私もちよつと覗いてみようかな。

投稿者「特命希望さん／一年ひみつ組」

タイトル「殺人予告！」

出ました！（笑）妄想屋お得意の殺害宣言！（笑）
殺人予告出ましたコレ！（笑）

あ、でも返り討ちにされないように注意してねー（笑）
相手、貴様よりも格段に強いから（笑）

投稿者「篝／二年ひみつ組」

タイトル「通報しました」

本文はありません

投稿者「特命希望さん／一年ひみつ組」

タイトル「殺人予告ですか…」

>おまえころすからあー、これはまずいと思うよ（笑）
ちよつと耐性なさすぎだったな残念！ ご苦労さん！
…ま、停学二週間ってどこか？

「え、え、え…。」

炎上だーーーーっ！

「嵐じゃ、嵐が来ておるっ」

ブログ炎上の憂き目にあっていた。

まあさすがに殺人予告出したらこつなるよね。

「な、なんだこりゃー！ーっ！

俺、政治家じゃないのに失言ひとつで猛チャージされすぎっ。
ネットこええええっ！」

「……………愚かしきこと」

「まあ瑚太郎ですからね」

「ってよく見たら二つ目のコメント篝じゃないか！」

気づかれたようだ…。

「気づかれてしまいましたか…。そうです、私が篝です」

とりあえずKIRAっぽく言ってみた。

「そんなことは知ってるよ！」

「まあまあそう興奮せずに落ち着いて下さい。
別に通報はしてませんから」

「本当に？」

「……………そこまで疑うのなら本当に通報しましょうか？」

「お止めください、篝様」

「分かればいいのです。」

それで瑚太郎はどう対応するつもりですか？」

「うゝん、粘着君に実際に会ってナシをつけ…

いや、対話を試みてみよう！」

「瑚太郎君…。ネットの問題はネットで解決しようよ」

「そうですね。今の状態の瑚太郎が会いに行くと、
校内暴力事件が発生しそうですし…」

「…俺の味方は俺だけか」

「さっさと謝って、とっとと終わらせた方がいいと思うよ」

「…うん、でもさ。」

リアルなら、負けなと思うし」

「何する気？」

「もちろん暴力なんて振るわないさ。」

ただ吉野さんはどうかわからないけどな」

「吉野君を連れて行く腹づもりなんだ。」

無理じゃないかな…」

「いや、できる」

「でも、ここで頭下げないと、学校中から総スカンくらうかもだよ」

「下げただけで解決するかね、これ？」

「キチンと謝れば、きつと通じるよ」

「…わかった。身内にも影響あることだし、今回は誠意見せてもいい」

「えらいえらい」

風祭学院の皆さん、こんにちは。オカルト研究会です！

当会は明るく楽しく身近なオカルトをモットーとし、皆さんの

グッドリンクを目指して、清く正しく

健全な活動を心がけていきたいと思います！

ここでひとつ、お詫びをしたことがあります

先日、掲示板にて不適切な発言がありました

勢いに任せた発言ではありましたが、公式の場で許されるはずもない内容です

課外活動を行う者としての心構えが不十分であったと真摯に受け止め、

今後二度と再発のないよう努力致します

この度のこと、誠に申し訳ございませんでした！

謝罪コメントのアップは完了したようだ。

「ふう…疲れた。」

文章問題ないかなあ？」

「うん、これなら誠意も伝わるよ」

「だといいわね」「だいいですね」

朱音とかぶってしまった…。

「さて、気を取り直して今日の活動、略してキョーカツだ」

「恐喝…」

「キョーカツするぞ」

「だから恐喝…」

「天王寺、天王寺」

「はい？」

「書き込みアリ」

「え、もう？ みんな早すぎる」

「試験も終わったばかりで退屈なのでしょね。」

「うちの子たちのお祭り騒ぎ好き、相当なものよ」

「お祭り騒ぎじゃないんですけどね、こっちは…」

瑚太郎の手により、さっそく表示が更新された。

投稿者「俺様（喧嘩三十段）／一年ひみつ組」

タイトル「やっと詫びたのかよ」

俺だけど（笑）まあようやく詫びたかって感じだな（笑）

誠意はあるみてーだけど、まだ調子こいてる文だな（笑）

ソッコー直しとけよ（笑）

俺に恐怖したんなら、ちゃんとそれなりの態度でいろよ（笑）

俺は屈服するヤツには礼儀求めるからよ（笑）

「……………」

「こ、瑚太郎君…」

「ヨッシーノ」

「え？」

「我に…闇の力を与えたまえ…」

冥界の門を開けよ、あなたがたの名と名誉にかけて。
来たりし万軍の悪霊の力を我に授けよ…」

「何か詠唱したたわね」

「ええ、恐らくは厨二病の神を呼びだすつもりでしょう」

「出でよ、叛逆せる闇の皇子、ヨッシーノ！ おおヨッシーノ！」

「いけない、邪悪なものを召喚しようとしてる。

ギャルぱんちっ」

「癒され体質っ」

「…はっ？ 俺、いつたい…？」

「怒りで我を忘れていたみたい。」

もう大丈夫だよ」

「そうなのか、よくわからないけどありがとう。」

…しかしひどいやつだ、こいつ。

先輩に対する態度じゃないぞ」

「そうだね。ついでに初対面に対する態度でもないね。

きつと、可哀想なんだよ。

だから許してあげなよ」

「うん…けどなあ…向こうがこれで飽きてくれればいいけど」

「書き込みよ、天王寺」

「だーっ」

投稿者「俺様（喧嘩三十段）／一年ひみつ組」

タイトル「はい時間切れ」

おいおい、駄目だろ雑魚虫君（笑）すぐに直せつつつたる？（笑）

とりあえずもうタイムオーバーなんで、

クソ研究会の雑魚虫同士で10発ずつ殴り合えや（笑）

終わったら報告しろよ？そしたら次の指令出すからよ（笑）

「久々にイラつときましたねこれは…。」

瑚太郎をけなしているだけならよかったのですが、他のメンバーまでけなすとなると……。

よしっ、ちよつと社会的に抹殺してきましょう」

「駄目だよ簞ちゃん!？」

「止めないでください小鳥。人にはやらなければならない時があるのです。」

そもそもこの粘着君のせいで私のコメントが2番目になった時からちよつと

むかついてましたし」

「今はやらねばならない時じゃないと思うよ!？」

それとコメントの件はそんなにむかつかなくても……」

「……………それもそうですね。小鳥の癒しパワーのおかげで

何とか冷静になれたようです。という訳なので瑚太郎、獲物は譲りますので好きに料理してきなさい。あ、ちなみに暴力は駄目ですよ」

瑚太郎観察日記をちらつかせながら、瑚太郎にお願い（命令）する。

「イエッサー」

うん。いい返事だ。

「小鳥も暴力なしなら構いませんね?」

「そういうことなら」

よし、小鳥の許可も出た。

「じゃあ決まりだな。あの、会長。これ書いた一年生って誰かわか

ります？」

「特定しろと言うの？」

「はあ、無理っすかね」

「…できないこともない。」

「が、あまり便利に使われるのは好まないわ」

「じゃ今回だけ、今回だけにしますからっ」

「…どうだか」

そう言いつつも朱音はどこぞに電話をかけている。

何だかんだで面倒見がいいな。

電話をかけてから数分後、折り返しの電話が返ってきた。

「わかったわ、一年C組の…」

「すぐでしたね」

「うちのネットワーク管理は教員でね」

「す、すごか権力たい…」

「暗黒魔法だ。回復や補助は苦手だが人を貶める術が多いんだ」

「敵に回さないようにしなきゃ」

瑚太郎は聞いた名前をメモすると、さっそく部室を出ていった。

「瑚太郎君大丈夫かな…」

小鳥はまだ心配なようだ。

まあこの前は電話帳引き裂いてたし、しょうがないかな。
よし、ここは一つフォローを入れておこう。

「大丈夫ですよ小鳥。瑚太郎を信じてあげなさい」

「篝ちゃん……」

「そう……、瑚太郎ならきっと粘着君を血祭りに上げてくれるはず

です！」

「そっち方面に信じちゃ駄目だよ!？」

「まあ今のは冗談です。さすがに瑚太郎もやっていい事と悪い事の区別くらいはちゃんと付けれるでしょう」

「うん…。そうだよねっ！」

ようやく小鳥も瑚太郎を信じることにしたようだ。

「では瑚太郎が戻ってくるまで私は読書でもしてますので」
「わかったよ」

という訳で一旦読書タイム！

「江頭…」

お、本に集中してたらいつの間にか瑚太郎が戻ってきてる。
どうやら粘着君はちゃんと連れてきたようだ。

「はい先輩…」

「意味わからん…」

「すいません…」

「本気で書くところという文章になるのか」

「はい…」

「最初と全然キャラ違うじゃねーか」

「……………」

「和解って理解してもらえるのかこれ？」

「まあいいや、補足しとく…帰っていいぞ」

「は、失礼いたします」

「脅かしたんだね？」

「脅かしたみたいですね」

「…いや、そこまでのことはしてないんだけど…。」

変なスイッチ持つてるヤツだったみたい」

「ネタを提供させたそうだけど、そちらの方はまともなのかしら？」

「なに、駄目で元々。調査するときに確認してみますよ」

「ほいじゃ、どうする？」

「そうだな…。」

ネタがあるから、さっそく調査してみよう」

「初調査だね」

「これにしよう」

「ツチノコ…？」

「ツチノコは満腹のヘビ」

まあその辺りが妥当な線かな。

「夢がねえっ」

「ツチノコは手品」

手品って…。

「無茶苦茶ですね、あんた…。」

未確認の動物は実在する余地あんでしょー」

「未確認の動物はいても、その中にツチノコはないでしょうね。」

あれこそ、まさに流言飛語」

「…ま、そういう可能性も高いですわな」

「おや、素直」

「俺自身がツチノコ実在に確信を持っているわけじゃないんで。」

でもないとも断言はできない。だから調べたい」

「具体的にはどうやるの？」

「ネットの力を利用したい」

…ところだけど、今はちよつとネットは

離れて…直に聞き込みをしようかと存じます」

「校内のことだしね」

「ツチノコ目撃報告、確かに最近、よく耳にするわね」

「情報提供者からもらったメモによると、そいつは中庭を中心に目撃が多発しているようだ」

「これからすぐに行けば、人も残ってるかもね」

「ああ、張り切って調べよう」

「…いつてらっしゃい」

「会長も来てくださいよ」

「いや」

「どうして」

「とても、面倒」

「……………」

「さんになで行く？」

「すみません、私も一旦パスで。

聞き込みとか面倒ですし。

という訳なので、ふたりで行って来たらどうですか？」

「うーん…」

よおおおおつし、あきらめるぞおお！！ イヤアツ！」

「…積極的に消極的だね」

「ふふふ、私の手を患わせない範囲で、おまえの好きにしたらいいわ」

瑚太郎は小鳥とふたりパーティーでクエストすることになった。

「行っちゃいましたね…」

「そうね。じゃあ私は本でも読んでるから、あなたも好きにしないかい」

「そうですか…。では私も読書に戻るとしましょう」

朱音も本を読み始めたようなので、こっちも読書に集中することにした。

本を読んでいる途中でツチノコについてちょっと

気になることを思いついたので、朱音に話しかけてみた。

「ラスボスさんすみません、ちょっと聞きたいことがあるのですが

…」

「？　ラスボスって私のこと？」

「ええ、そうですか？」

「何でそんなおかしいものを見るような顔で見つめられているのか全く分からないのだけど…。大体何で私がラスボスなのよ…」

「瑚太郎が会長はラスボスだから気をつけるって言ってたからですか？」

とりあえず瑚太郎に罪をなすりつけてみよう。

「天王寺とは後でちょっとO　H　A　N　A　S　H　Iが必要なようね

…」

今の言い方からすると、なのは式かな？

「まあ瑚太郎とのO　H　A　N　A　S　H　Iは後でやってもらうとして、

今瑚太郎たちが探しに行っているツチノコですけど、もしかして魔物でそれっぽいのがいたりしますか？」

「ええ、いるわよ。使用者は少ないけれど、蛇をベースにした魔物でツチノコとよく似た特徴を持っているそうよ」

「なるほど。おっと、ラスボスさんと話していたらいつの間にか

けっこう時間が経ってますね…。どうやら瑚太朗たちも来たみたいですし、この話はここで止めておいた方が良さそうです」

小鳥はいいけど瑚太朗に聞かれていい話じゃないし。

「天王寺たちが来ているの？ よく分かるわね。

ここは一応完全防音なのだけれど…」

「まあ聴力を強化すればこの程度の防音は問題ないですからね」

「本当、便利な能力ね…」

「あ、ちなみに瑚太朗はラスボスとか言ってますので」

「ええ分かっているわ、私も少し乗ってみただけよ」

「それならいいのですが…。いくら私でも無実の罪で

瑚太朗が処刑されるのは目覚めが悪いですからね」

「処刑なんてしないわよ…。あなたは私を何だと…」

いえ、やっぱり言わなくていいわ。絶対ラスボス
って言うてくるでしょうし」

ち、どうやら思考を読まれたようだ。

「んじゃ、デジカメデジカメと…」

「何を勝手に漁っているの」

「は、部の備品を探索しているであります」

「…カメラはその棚」

「あ、こっちか」

「メモリのカードはどこですか？」

「一緒に入ってるわ」

「借りて良いです？」

「ご自由に…」

「すげ、電腦小僧大喜び…」

「千枚取れるよー」

「おうつ、俺だってデジタルズームと顔認識で被写体逃さないぜ！」
「ヤー！　じゃ、改めて…」
「こんにちはー」

お、ようやくちはやが来たようだ。

「ん」

「げ」

「相変わらず失礼な挨拶だな」

「流行るかもしれないわね。人に会ったら開口一番『げ』」

「げ、会長！」

「短くていいわね」

「なんだかよくわからないんですけど」。

「とりあえず何で瑚太朗がこんなところにいるんです!？」

「逆に訊きたいわね。何であなたは」

「今までこんなところにいなかったのかしら」

「え、えーと、それは」

「大方道に迷ってここまでたどり着けなかったんだろう」

「う…」

さすがはちはやだ。いくら広いといってもさすがに一度は行ったことのある部室まで辿り着けないとは…

「ま、いいけど。毎日顔出せとも言っていないし」

「だって、おんなじようなところばかりで、

どこだかわからなくなるんですよ」…。

なんか知らない人たちにちくちく裁縫するよう

勧められて、そっち行つてばかりで」

「…手芸部？」

「空き教室を拠点に活動してたわね、そっぴえば。同好会だけど」

「一生懸命断ろうとしてたんですけど、ようやく断りきれました…」
「そりゃ難儀だったねえ…」

「お前本当によく迷うな…」

「そのうちシベリア行きの船にでも間違えて迷い込んで死ぬわね」

「朱音さん、冷たい…」

「それと、手芸同好会は掛け持ちでも良いのよ」

「もう針はいいです…」

「……皆さん、私の存在を忘れていませんか？」

「「あつ！」」

「えーと、どちら様です？」

「私は小鳥の親友の簪です。私も才力研所属ですので、今後とも宜しくお願いします」

「あ、これはご丁寧にどうも。私は

鳳ちはやです。私も一応才力研所属みたいです」

「つて、ちーちゃんもここ所属なの？」

「はい、えーと、多分そうです」

「ああ、そういうやそんなこと言ってたな。じゃあ、簪と鳳の自己紹介も済んだみたいだし、早速五人で調査開始っ！」

「開始っ！」

「は、はい？ 突然なんです！？」

「せつかくだから付き合ってあげなさい」

「ええー、でも…」

「あなたとしても、この子のパワーは欲しいところでしょう？」

「有用そうだし、会長が手綱とってくれるんですよね」

「そうね」

「なんかよくわからないですけど、朱音さんがそう言うなら」

ちはやがメンバーに加わった！

「じゃ、がんばって」

「来ないのかよ!」「来ないんですかつ!」

「うお、タイミングぴったりっ」

「あ、ちなみに私も今日はもう帰りますから」

ちはやとの顔合わせも済んだし。ちよつと読みたい本もあるし。

「ええっ!? 篝ちゃんまで来ないの?」

「ええ、ちよつと読みたい本があるので今日はもう帰ろうかと」

「そっか…。じゃあ仕方ないね」

「そういう訳ですので、皆さんお疲れ様でした」

「ああ、お疲れ様」「お疲れ様です」「…ご苦労様」「おつかれさま」

…これでちはやとも面識を持ったし、後オカ研メンバーで面識がないのは、

ガーディアン勢の静流とルチアだけか…。

まあ正体ばれとかはないはず…だよな。

10月15日(金)

アルファブロガーへの道(前書き)

ようやく更新できました。

一日一回更新はきつくなってきましたので、

これからはちよつと更新頻度が下がりそうです。

ですが多分週に2〜3回くらいは更新すると思いますので、
これからもしよろしく願います。

10月15日(金) アルファブロッガーへの道

「今日は集まりが悪いみたいですネ」

放課後になったのでいつものように才力研部室に遊びに来たが、今日は人が少ない。どうやら小鳥とちはやは来てないみたいだ。

「おお、篝ちゃんどこいいとこに来たな」

「どうしたんですか？」

「いや、ブログ用の記事が書き終わったんで会長に確認して貰おうと思ったんだけど、うちのボスはご覧の有様だな」

どんな状態なのかと思い、朱音の方をしてみる。

……朱音は画面を睨みつけ、キーボードを連打していた。

「…なるほど、朱音の代わりに私に確認して欲しいということですか」

「そういうことだな。という訳で確認してもらってもいいか？」

「まあそういうことならいいですよ。私も才力研の一員ですし」

「すまないな。じゃあこれ、確認してみてください」

そう言っただけで瑚太郎はパソコンの前を空けた。

どれどれ、どんなものができているかな。

……これは。

「どうだ？ 自分では良く出来たと思うんだが……」

「ええ、まあ私も良く出来ているとは思いますが、思いますが……」

「思いますか？」

「何でこれだけ文章が書けるのに、ブログ開設時の

挨拶文はあんなに酷い出来だったのですか？」

「う……それは」

「それは？」

「すみません、小鳥に褒められたりしてちょっと調子に乗ってました」

「では今後はきちんと推敲してアップロードするようにしなさい」

「分かったよ……。さすがに第二の江頭が出てきたら困るしな」

「今回の私チェックしましたし、このままアップしてもいいと思いますよ」

本当、瑚太郎は調子に乗りさえしなければ

けっこうハイスペックなんじゃないだろうか？

「……じゃあこれで完了と」

ブログの更新は完了したようだが、瑚太郎は全く動かない。どうやら何か考えているみたいだけど……？

「自作……自演……？」

ろくな考えじゃなかったみたいだ。

「それは畏よ天王寺。

ブログは……手数」

お、いつの間にか朱音がゲームを止めてる。

「手数……？」

「そうか、更新頻度を限りなく高めれば……」

「そう、その時おまえはアルファブロガーにもなれよう」

「マジすか…。」

手数勝負…もっと記事を書けってことだ。
ならネタ募集もしなくては…」

「しなさい」

「月に一回更新とか、そんなレベルじゃなくて…」

そう、最低でも週に一度の更新をしちゃわなくては…」

「しちやいなさい。」

アルファブロガーは、日に三度更新することもあるという」

「なんだよそりゃ…：どんだけ時間あまってんだあ」

「時間は余るものではなく作るもの」

「かつこいいい！」

「会社のパソコンで更新すりゃいいのよ」

「………：解雇リスクを背負っての更新すか…。」

でもウチは更新するためにはネタの投書がないと…」

「じゃ覧」

朱音が指さしたのは、投稿フォームからの
着信を振り分ける指定フォルダだった。

「あ、投書来てる」

お、ネタが4件も来てるみたいだ。

「おお！」

ど、どんなネタだ…？」

ネタ『31歳人妻です。浮気相手を探しています』を入手した！
ネタ『女子×学生ってダメ？ エッチなこと教えてくれる人募集』
を入手した！

「ガセ以前の問題だあ！」

ネタ『31歳人妻です。浮気相手を探しています』を削除した！
ネタ『女子×学生ってダメ？ エッチなこと教えてくれる人募集』
を削除した！

「…身内の犯行」

「またネット海賊か…」

身内って校内でしょ。いやな気分になるなあ」

「ネタの蓄積があれば選択肢が生まれる。

天王寺、勝ちたいならネタをお探しなさい。

そして記事を書き、頻繁に更新なさい。さすれば…！」

「相乗効果で！」

「バツキバキやで！」

「……………そういうことを言うキャラでは、ない」

「自分でノったでしょ。俺悪くない」

「あまり調子づいていると暗黒魔法の餌食だから」

「…それって政治力でボコるって意味だからなあ……………」

「とにかく、あまり更新していないとネタも集まりが悪くなるのは必然。

キチンと活動していれば、おのずと人も集まるはずよ」

「そうなると相乗効果で！」

「…もうその手には乗らないわ」

ちっ、さすがに引かからなかったか。

「ふーむ。

夢が広がるな…」

「ところで、投書ではない普通のメールも来ているのね」

「え…？」

「新聞部・井上。」

「知り合い？」

「あいつか……！」

「噂を聞いたことがあるわね。知り合いだったの？」

「……向こうから話しかけてきて」

「まあ見てみましょう」

『天王寺君、記事、見たよ。』

出来映えはまだただけど、その行動力は かな。

正直、こんなにはすばやく動くとは思ってなかったから、見直したかも。

文章はぎこちないし、切り口も甘いし、ネタ記事以上のものにはなっていないけど、エンターテイメントとしてはアリかな。

健闘を祝して、スクープをひとつ提供してあげる。

うちでは持てあましたネタ。まあ頑張ってみてよ、本職さん。ばーい井上』

ネタ『敷金礼金なし、幽霊同居物件案内』を入手した！

「ネタをゲットしたわね。私が言っていたのはこういうことよ」

「幽霊ネタはちよつとイヤなんですけどね……」

「選べる立場なの？」

「ひとりで調査するのが怖いなら、友達でも誘いなさい」

「友達……」

どうやら交友関係の狭さから悩んでいるようだ。

しょうがない、ここは助け舟を出しておくかな。

「ちはやでも誘ったらどうですか？」

きつとちはやと一緒に行けば恐さがなくなりますよ」

「確かに、ちはやと行ったらホラーがコメディになりそうね」

「いや、まださすがに二人つきりつてのは無理だろう」

「それもそうですね」

「まあしばらくそうやって遊んでいるといいわ。」

多少のトラブルはこちらで吸ってあげるから」

「ありがたい話ですけど…」

やっぱり朱音は瑚太郎に甘いな。

「あ、ありや 静流だ」

どうやら窓の外を見ていたら静流を発見したみたいだ。

「誰？」

「ん、知り合いです。」

「どうだー、お前も来るか」

おーい、と手を振っている。

「窓開けなきゃ、見えも聞こえもするわけないでしょ」

「ま、そうすね」

がら、と窓が開かれた。

「ありや、もういねえ」

話が済んだと思ったのか、朱音は唐突に機械を取り出し、ドンと机の上に乗せた。

「なにこれ」

「コーヒーマーカー。使えないけど」

「壊れたんですか？」

「ちはやがいじってたら壊れたのよ。」

ほら、これ：ダイヤルが馬鹿になってる」

「さすがはちはやですね」

「もう新しいの買ったらいいじゃないですか」

「もったいない。直るなら直すべきだわ」

「まあ、わかるけど。」

でもこういう修理ってよくやるんです？」

「やらないわよ」

「見せてください」

こういうことに慣れているのか、瑚太郎は大して時間もかけずにコーヒーマーカーを分解した。

「うわ、古いなー……」

確かにかなり古い。

よくこんなものを直してみようと思ったな。

お金はあるだろうし、買えばいいのに。

「うーむ」

「直る？」

「無理ですね…ダイヤルの部品が欠けてるとかなら何とかしようがあるけど、中の機械がイカしてるならもうどうしようもない」

「仕方ないわね。買い換えましょ」

「まあ、いいんじゃないです？ こいつ

この部屋にはなんか不釣り合いだし」

「愛着つてものがあるのよ。それにご存知？ 長く

使われたものには霊が宿るの。ツクモガミって言ってるね」

朱音はそう言いながら、外装を手を取った。

「荒ぶれば妖怪、多く禍をもたらし、和ぎれば神、幸をもたらす。どこの国でも似たような話は在るわ」

「日本バージョンだと、百年要るんじゃないかっただけそれ」

「あと八十年ちよつとじゃない」

「達成するころには俺ら死んでそうですけど」

「案外その宿る霊つてのは、使っていた人間そのものだったりね」

「こえー」

「素敵じゃない。」

ま、廃棄」

外装をゴミ箱の傍らにぼん、と放る。

すかさず秘書らしき人がそれを抱えあげた。

……ところであの人何て名前だったかな？

「中身も一緒に捨てていて」

…愛着、愛着ねえ。

と、そこにとんとん、とノックの音。

「ん」

「出て」

びし、とドアを指差す朱音。

「へいへい…」

瑚太郎は朱音の要請により、来客の確認に向かった。

「オカ研に来客なんて珍しいですね。一体誰が来たんでしょうか？」

中々瑚太郎が帰って来ないので、朱音に話を振ってみる。

まあ来たのは多分静流だろうけど、一応とぼけておかないとね。

「さあ？　ここを訪れる人なんて、私たち以外にはいないはずだ
けど。」

というかあなたなら誰が来たくらい分かるのではなくて？」

「まああまり無駄に能力を多用するのもどうかと思いますし、

普通に部室から出て確認してみましよう」

「面倒だわ……」

「まあまあそう言わずに」

面倒くさがる朱音を何とか説得し、部室の外に出てみる。

「ご褒美にキス？」

後輩女子にセクハラっと。

今、瑚太郎観察日記に新たなページが刻まれた！

「……………！！！」

静流は手をぶんぶんさせて否定していた。

「じゃあ……」

「口の動きと喉の動きで大体わかる」

「読唇術っすか……」

てか、あの距離から？」

「見える範囲なら……コタローは口の動き大きいからわかりやすい」

「すげえじゃん……」

すげー、会長と静流いたらいくらでも悪事が可能じゃん」

「あなたなんぞが私を『使う』つもり？ 身の程知らずもいいところね」

さすがの朱音も瑚太郎に利用されるのは嫌なようだ。

「あ、いえ」

「見てたわ。すごいわね、あなた」

「本当、読唇術が使えるなんて凄いですね」

静流は瑚太郎の後ろに隠れた。

「ああ、人見知りだから気にしないで。

ほれ、静流さん挨拶です」

「……………静流です」

「じゃ、朱音よ」

「私は篤です」

「よろしく」

「こちらこそよろしく」

「私も宜しく願いますね」

「なあ、こいつ活動に参加させていいです？」

「？」

「つまりだ……」

瑚太郎が才力研の活動について説明した。

「…やりたいが…」

部に所属はできない」

「そうかあ。」

じゃ、手伝いでいいから」

「それなら」

「いいのかっ」

ぐ、とOKサインが出された。

「強引ねえ……」

「いいじゃん。こいついたら楽しいぞ」

「楽しいっていわれてもね。」

部外者はあまり」

「役に立つから、良いじゃん！　お願いー！！　ねえったらー！！」

「ああはいはい……駄々っ子の相手はいやよ」

「だそうだ。やったな静流」

「よくわからんがやったのか？」

「やったさ」

「おー」

「……別に、いいけど……。」

責任、あなたが取りなさいよね」

「別に大丈夫だろ」

「私は言っただわよ」

朱音はそう言い残すと部室に戻っていった。

「……私は、コタローの手伝い？」

「そうね」

「ではこれからも宜しくお願いしますね」

……… 静流が才力研にお手伝いさんとして参加することになった！

10月16日(土) 魔神が生まれた日(前書き)

今回は中々時間がかかってしまいました…。

やっぱり週に2〜3回更新は難しいみたいなので、

週に1回くらいの更新を目指していきたいと思います。

ちなみにタイトルは本筋とは全く関係ありません。

本文を書いている途中にふと思いついたのでこれにしてみました。

分かる人は分かると思いますが、コードギアスから取りました。

10月16日(土) 魔神が生まれた日

今日も今日とて部室へと向かう。

まあまだ休み時間だから朱音くらいしかいないかもしれないけど、一人家で暇を持て余しているよりはいいだろう。

……そういえば部室はネット環境も整ってるし、授業の間は部室に居るのもいいかもしれない。今度瑚太郎とちはやが居ない時にでも朱音に頼んでみよう。そんな事を考えながら部室の前まで行くと、中から話し声がしていた。

「ハハハ、お嬢様は冗談がきつい。どこぞの馬の骨様に、ちはやさんのファーストネームを呼ばせるなどとは」
「いちいち腹の立つ野郎だな」

この声は咲夜かな？ どうやら今日は咲夜が来る日だったみたいだ。

「…ふん？ とりあえずあなたの初対面の印象は最悪でした。もう少し落ち着きというものを持っていただきたい」
「それには私も同意します」

とりあえず、私、参戦！！

「うわっ！ いきなり現れるなよ篝。びっくりするじゃないか」

「何か休み時間なのに部室が騒がしかったのでちょっと様子を見に来てみました。」

それで、一体こちらの方はどなたですか？

「ふむ…、あなたも才力研の部員ですか？」

「ええ、私は篝といえます。どなたかは分かりませんが、宜しくお願ひします」

「これはご丁寧にどうも。私はちはやさんの兄で、鳳咲夜と申します」

「なるほど。ちはやのお兄さんでしたか。では改めて宜しく願いますね」

「ええ、こちらこそ」

特に問題も無く自己紹介は終わった。

やっぱり瑚太郎に対して色々と言うのは、瑚太郎の言動のせいかな？それともちはやが瑚太郎の事を家で話していたからだろうか？

「会長…、俺に対する態度と全然違うんですけど…」

「諦めなさいな」

私が咲夜と普通に話しているのを見て、瑚太郎が落ち込んでいた。

「何か篝の登場で話が逸れてしまったけど、こっちとしても

ガン無視とか、初対面の印象は最悪だったけどな」

「まあ私は別にちはやでもいいですけどね」

「さすがはちはやさん。どこその馬の骨様にも慈悲深いことで」

「いえいえー」

「じゃ、ちはや」

「何を馴れ馴れしく言いますか。無遠慮選手権というものがあれば、あなたは世界トップランクの榮譽を得ることでしょうね」

「ホントに慇懃無礼ね、おたく」

「……個人的にも私はあなたが嫌いです」

「うわあ、どつかで聞いたような台詞」

「では、私はそろそろお暇するとしましょう。」

ちはやさんも歓談は結構ですが、夕食には帰宅されるようお願いします」

「わかりましたー」

「それと、お茶菓子をお持ちしていたのを忘れていました。

お嬢様と簀さんもよろしければお上がりください。中身はクッキ―です」

「…ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「えーと、それから…あなたは…」

馬ノ骨ゲス野郎君でしたか？」

「て・ん・の・う・じ・こ・た・ろ・うだ…!!」

「似たようなものですね。よろしければどうぞ」

「咲夜さん、今のはちよつと聞き捨てなりませんね」

「そうだそうだ。言ってやってくれ簀」

瑚太郎は私が加勢すると思っているようだが……

それは大間違いだ!!

「ここにいる瑚太郎の事はどう言おうが構いませんが、

今の発言は、全国の瑚太郎さんに失礼ですよ」

「確かにそうですね。ご忠告ありがとうございます。以後は気をつけましょう」

「俺を擁護してくれるんじゃないのかよ!？」

「いえ、普段の瑚太郎の言動を見ると、

ナチュラルに失礼な態度を取ってそうですし」

「俺ってそんな認識なの!？」

「ええ、まあ割と」

私がそう言うと瑚太郎はがっくりと膝をついた。どうやらけっこうなショックを受けたようだ。

「ああ、あと…」

「なんだよ……」

声に全然覇気がない。ショックは思ったよりも大きいようだ。

「…あまり余計なことに首を突っ込まないことです。

私はあなたが『嫌い』ですから」

「…んな念を押されなくても」

咲夜がじろり、瑚太郎を凝視している。

「な、なんだよ」

今度は朱音のほうを。

「何？」

「まあ、いいでしょう。お嬢様のお付には相応しいのかも知れませ
ん」

「やりましたね朱音。褒められましたよ」

「そう？ これは褒められたのかしら？」

「さあ、どうでしょう。それも瑣末なことです。では、御機嫌よう」

一礼して出て行った。

「…ねえ、お嬢さん、あいつ普通に出て行きましたが、

目立つちやまずいんじゃないかな？」

「もうどうでもいいわ…」

「あ、そう」

「それはいいけど、もう休み時間終わるわよ」

「げっ！？ 当初の目的が！」

そう言うと瑚太郎はダッシュで部室を抜け出した。

「結局瑚太郎は何の為に部室に来たんでしょうか…」

「さあ？」

「何ででしょうねー」

ちはやがのんびりとした声で答えた。

というかちはやも授業があるんじゃない？……。

「何かのんびりしてるみたいですけど、

私たちも早く戻らないと遅刻ですからね？」

「ああっ！　そうでしたっ！」

素で忘れていたようだ。さすがはうっかり魔人……いや

ここはもう、すっかり魔神とでも呼んだ方がいいだろうか。

「そつえばちはやは何をしに部室まで来たんですか？」

ふと疑問に思ったので訊いてみた。

「ええと、朱音さんを昼食に誘おうと思って…」

「私を？　まあ別に構わないけれど…」

「本当ですか！？　じゃあ授業が終わったら

部室に来ますから、待っててくださいね」

「ええ、わかったわ」

そつ言い残すと、ちはやも慌てて出て行った。

直後、何か鈍い音がしてきたが、まあちはやだし大丈夫だろう。

さて、ちはやと瑚太郎は居なくなっただし、部室に

入り浸る件について今のうちに頼んでみるかな

「そういえば朱音、ちょっとお願いしたい事があるのですが…」
「あなたが私に頼み事？ まあ内容によるわね」

まあそれはそうだろう。

「えっと、お願いしたい事というのは、小鳥が学校に行っている間家にいても暇なので、部室に置いておいてもらえないかな」と思っています…」

「いいわよ」

「そう言わずにそこを何とか」

「だからいいわよ」

「え？ いいんですか？」

「ええ、だからそう言っているじゃない」

「ありがとうございます。正直もつと渋られると思いました…」

「何？ 断って欲しかったの？」

「いえいえ。ありがたく部室に入り浸らせてもらいます」

「まあ、私も一人よりは誰か傍に居てくれた方がいいしね…」

朱音が普通の人には聞こえないくらいの音量でぼそつと呟いた。
まあここは聞こえなかったことにしておいた方がいいかな。

「何か言いましたか？」

「いいえ、何も言っていないわよ」

「そうですか」

「ええ、そうよ」

「では今後は部室に入り浸る事になると思いますので、今後ともよろしく願います」

……何はともあれ、朱音からの許しも出だし、
来週からは部室に入り浸ることにしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0354y/>

毒舌？な篝(かがり)ちゃんのほのぼのオカ研生活

2011年11月24日22時53分発行